
逆行なのはさん奮闘記

takaya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆行なのはさん奮闘記

【Nコード】

N9958I

【作者名】

takaya

【あらすじ】

マッドなサイエンティストを父に持ち「心は大人、体は子供」を地で行く逆行魔法（砲）少女を幼馴染に持った奇特な運命を持った少年。

そんな彼が、始まる前から崩壊している物語を突っ走る！

* 注意

この作品は、某有名投稿サイトで投稿されていた作品で、作者の
マッドJrさんから託された作品です。

途中からマッドJrさんのような文章では無くなると思いますが、
ご了承の上、お読み下さい。

序章1 『五歳児に十倍の重力はきつかったようです』（前書き）

この話の注意点は

- ・主人公がチートです（具体的に言えば転生したわけでもない五歳児が理路整然とした思考をしている等）。
- ・多重クロスです（ネタ的な意味で。人物などは一切出てきません）。
- ・なのはさんが逆行してきます（アンチ管理局ちよいスレ？）。
- ・ご都合主義満載です。
- ・性格改変（主になのはさんとマッド）があります。
- ・原作崩壊、かなりオリジナルストーリーになります。
- ・不定期更新です。

主人公は、強いといえば強いんですが、なのはやフェイトクラスに距離を置かれたら瞬殺されます（完全なインファイターなので）。

魔力資質は高いのに魔導師適正は低い（射撃魔法、砲撃魔法が極端に苦手等）、など極端な最強にはしてありません、一応。

この話は逆行なのはさんの原作知識と、マッドの常識はずれな科学力とで問題を解決していきます。

また、マッドは、最高評議会に作られた後、すぐにその手から抜け出しています。

以上を踏まえて、覚悟の上でお読みください。

序章 1 『五歳児に十倍の重力はきつかったようです』

母さんが死んだ。といつても別に不慮の事故とか殺人事件に巻き込まれたわけじゃない。生まれついて不治の病を患っていたらしく、俺を出産できたのも奇跡だったらしい。俺を生んで衰弱した体でいつ死ぬかわからない。そう言われてから五年、ここまで生きながらえたのはやっぱりマッドな父さんのおかげだと思う。

その父さんは、母さんが死んでも相変わらずマッドサイエンティスト振りを発揮していたけど、本当に悲しんでいるのは幼い俺にも理解できた。だからかな、俺は言ってしまったんだ。

「俺、母さんがあの世で自慢できるような、世界で一番強い男になりたい」

って。

それを聞いた父さんは、父さんに似合わない、暗く目に宿った狂ったかのような光を消し、母さんが生きていたころ見せていた子供のような強い光を取り戻した。そして、俺や母さんにしか見せない優しい表情でこう言ったんだ。

「任せておきなさい。私の科学力と悠斗の努力に勝るものはない！」

そういうが早いか、俺のことは忘れたかのように自分の研究所に駆け込んで行った。

母さんが生きていればここで困ったものだ、と笑いあうのだが母さんはもういない。それでも、母さんと同じように俺もマッドだけ

ど優しく、いつも子供みたいなお父さんが大好きだったんだ。

一抹の寂しさを覚えながら、今言った言葉を現実のものにしようと、とりあえずランニングから始める事にした。

その次の日、親父はいつの間にかできていた家の隣にある丸いドームの中に俺を招き入れた。

昨日までこんなものはなかったのに、と首を傾げながら入ってみると、そこには得意そうな顔をしたマッドがいた。

「きたな、悠斗。それではこれから『悠斗スーパーミラクルストロング大作戦』の第一段階を開始する！」

なんだそのネーミングセンスは。何だそのスーパーでミラクルな大作戦って。第一段階って何だ。いつものようにつつこもつと見れば、そこにはもうすでにマッドはいなかった。

『それでは始めるぞ。この建物は私がある漫画を参考にして作った装置を再現することのできる施設だ。ちなみに今現在100倍にまで負荷をかけることができる』

一瞬目を離れた際に消えていなくなったマッドからのアナウンスに俺を大慌てで出口へと向かった。いつの間、どうやってなんて考えるまでもない。マッドだからだ。この親父がこんな風にうきうきした声で説明し始めた時にはたいていいろいろな発明品じゃあない。

あと少いで出口にたどり着く、といったところで無情なことにア
ナウンスから軽快な声が響いた。

『それじゃあいくぞ、まずは十倍からだ。……ポチツとな』

ポチツというボタンを押したような効果音とともに、俺の体が地
面に引き寄せられた。いや、叩き付けられた。

「ぐあつー!」

がつん、と頭から落ちた俺は頭を抱えて転げまわろうとして、腕
を上げようとしたところ、腕が動かなかった。それどころか体全体
が地面に縫い付けられたかのように動かなくなり、肺や胃がぎしぎ
しと悲鳴を上げている。

『どうだい？ この重力制御装置は。かの主人公はこの装置によつ
て強くなり、宇宙でもトツプクラスの実力を身につけたんだ。それ
で、やってみての感想はどうだい？ 悠斗』

うきうきと声を弾ませ、感想をねだる親父マッパの声を聞きながら俺は、
自分の親父マッパがこういうのだったことを忘れた自分を罵りながら意識
を手放した。

序章1 『五歳児に十倍の重力はきつかったようです』（後書き）

某投稿サイトでかなりの人気を誇っていたこの作品ですが、たまに高校の友達にネット小説を書き始めたのをしゃべったのが始まりでした。

あれよあれよという間に私が書くことになっておりました。

私は、他に書いている『学園最強ファンタジー』からも分かる通り文才がありません。なので、この作品は三次創作の類だと思っ
てください。

感想、ご指摘、批判、待っています

序章2 『初めての友達は魔砲少女』

今日、始めて友達ができた。

家族以外の人とこうして他愛もない会話をし、笑い合えることがとても嬉しかった。

何故かというと、残念ながら俺の家はマッドな父親が毎日のように怪しい実験をしているせいで、ご近所の評判は悪い。

各家庭の親御さんが子供に「あそこの家の子とは仲良くしちゃダメよ」と言っているらしく、俺に近寄ってくる子供がいなかったのだ。もちろん寂しかったし、前に謂れない理由でいじめられたときなんかは母さんに何でいじめられなきゃならないんだ、と泣きついたりもした。けれど、そのときの親父の顔が酷く済まなそうなのを見て、もう二度と言うことは無くなっていた。それでも、心の奥に「友達がほしい」という思いはずっと燻っていた。

そんなある日、親父曰く「悠斗強化スーパーミラクル大作戦」の第二段階に移るには体力や筋力が足りないと言われた。第一段階が発動して二日も経っていないときのことだ（とりあえず第一段階の重力制御装置はとりあえず1.5倍から始めた）。そのため、ランニングを欠かしてはいけなと言われ、夜な夜な重力制御装置での鍛錬が終わった後にクールダウンとして走っていたのだ。

そこで、運命の（？）出会いがあった。ちょうどランニングの間が重なるらしく、同じくらいの年の女の子がいつも同じコースを走っていくのを見かけた。そして、何度も見るうちにそれが同じ幼稚園の高町だということに気づいて声をかけたのがきっかけだった。

高町は歳に似合わず、きれいなフォームで走る。普通このぐらいの歳ならば手足をばたつかせながら走るのが精一杯なはずなのだが（俺も親父に矯正されるまではそんな感じだった）、高町の走り方がきれいだったので思わず声をかけた、というのが本音だった。

高町は俺のことを嫌な目で見ない数少ない人物だったこともあり、話しかけやすく、話が弾んだ。お互い、歳に似合わない落ち着いた話し方や、考え方もあり、周りからは浮いていたのだが、やはりこうやって同年代で通じ合うのは嬉しかったのだろう（俺は嬉しかった）。

俺たちはすぐ仲良くなり、毎晩一緒に走るようになり、幼稚園でも一緒に遊ぶようになった。すると、自然と高町の友達の二人もついてきて、四人で遊ぶことになった（その時アリサに苗字禁止令を出された）。

また、幼稚園が終わると、最近事故で親を亡くし、自身も脚を悪くした女の子と一緒に図書館で絵本を読むのだ、と嬉しそうに語ってくれた。

そして、そんな生活が一ヶ月ほど続いた今日。アリサやすすかは習い事ではやてという少女は病院でいなくて暇だ、と零したなのはを我が家に招待したのだが……

「やあ、いらっしやい」

「ただいま」

「……………（パクパク）」

家に着き、親父が出迎えてくれたのだが、俺の隣でなのはがすこいものを見たかのようにして固まっている。

「ジエ……」

「「「じえ？」」」

「ジエイル・スカリエツィー！！??？」

「「「????」」」

なのはは親父の顔を穴が開くほどに親父をじろじろと見つめている。こらそこ、照れてるんじゃない。

「だ、だって悠斗君は……」

「ああ、そっか。俺の本当の名前は高梨・スカリエツィーS・悠斗。普段はめんどくさいからミドルネームは名乗ってないだけ」

「そ、そんな……」

がつくりとうなだれるなのは。そんなに気にすることか？

「なんだか知らないが、歓迎するよ。なのはちゃん。なんせ悠斗が始めて連れてきた友達だ」

ははは、と上機嫌に笑う親父は本当に嬉しそうだった。

なのははそんな親父を静かに見つめると、ゆっくりと口を開いた。

「あの、スカリエツティさん、お話があります」

「ん？ なんだい？」

「えつと……」

「あ、悠斗には聞かせ辛いことかい？」

「あ、いえ……」

言い淀み、ちらつと俺を見たのはを見て、親父はニヤニヤと笑いながらちよっかいをかけてきた。何を勘違いしてるんだ、何を。

ちらちら見てくる親父の視線に、なんだか知らないが背中がむず痒くなったので、視線をそらした。

「別に大丈夫なんですけど、理解できるかどうか」

「ふむ、それなら大丈夫だろう。なんせ悠斗は私と比奈の息子だ。頭の回転や柔軟性はぴかーだ。私が保証しよう」

「……わかりました。では話ができる場所で」

「ならリビングでいいかい？」

お願いします。と頭を下げた時のなのは顔は、みんなと遊んでいるときの無邪気な顔や、俺と二人で話しているときの利発そうな顔とも違っていた。

「ふむ、過去から来た、か……」

リビングについてからのなのはの話は突拍子のないものだった。

過去で、自分の所属していた組織（司法組織らしい）に騙された拳句に殺され、気づいたらここにいるというのだ。

そして、親父は悪の科学者で、人間と機械を組み合わせた戦闘機人というものを作り出し、なのはの所属していた組織に対してクーデターを起こしたというのだ。

なお、その親父は並外れて傲慢且つサディスティックだったらしく、この親父とは似ても似つかないので同姓同名の別人かとも思ったが、親父は確かに魔法世界のことを知っていて、今も何人かの友人とはやり取りをしているらしい。また自分がそういう組織に作られた存在だったということも言われるでもなく知っていたらしい。

初耳だぞ、俺。

「なるほど、しかしならば魂の逆行。今まで不鮮明だったが魂という存在が確定すればあの子も何とかなるか……？」

「おーい、親父。帰って来い」

すぱーん、と親父の頭を一発引っ叩く。なにするんだ、という抗議の視線をまたなんか変なことしてないだろうな、という視線で追いつ返す。

「なに、ただの人助けさ。……さて、なのはさんと言ったね？」

「はい」

「結論から言つとそれは真実なのだろう」

「ありがとうございます。それと、その……」

「ああ、聖王の子のことかい？ 残念だけど私はもう管理局とは縁が切れている。済まないが君の娘だったというヴィヴィオ君は誕生することはないだろう」

「っ………そうですか」

なのはは親父の感情の籠っていない声に思わず頭を上げたが、親父の済まなそうな瞳を見て頂垂れた。

「君の事を誰も覚えていないということは辛い事だと思う。だけどそれにくじけずにかんばりたまえ」

「……はい」

正直、こういつときの親父は本当に立派だと思う。だけど、なのはの悲しそうな顔が俺の心に引っかかった。

「……なあ、なのは」

「悠斗君？ なにかな？」

「確かに、なのはのことは誰も覚えてないと思う。だけど、なのははまたアリサやすずかと一緒になれたじゃないか。例え、なのはの知っているアリサやすずかじゃなかったとしても、なのはの好きな二人には違いないんだろ？　なんていうか、上手く言えないけど、前上手くいかなかったんなら、今回またがんばればいいじゃないか。前がんばったんだから、今回はゆっくりと過ごすのも、いいと思うぜ？」

「……そう、だね。ありがとう悠斗君。なんかちょっとだけすつきりしたかな」

説教くさいこと言ったのにこっと笑って御礼を言ってくるなのはの顔を上手く見れずに思わずふいつとそっぽを向いてしまった。

それを見たなのはがふふっ、と笑うとほっぺたをつんつん突付いてきた。

「ああ、もっつ、子ども扱いすんなっ！　言っとくけど、お前が大入だろつが俺はお前との態度を変えるつもりはねえからな」

びしっと指を突きつけて宣言してもなのははくすくすと笑って笑いすこす。なんだかそれが無性に気に入らなかった。

「おいこら」

「ふえ？」

むんずとなのはの頬を掴むとそのまま縦横無尽にこねくり回す。

「ひいたい、ひいたい。ひゅうとくんいらっいっれ」

ぱちん、となのはの頬を元に戻すと赤くなつた頬をさすつている
なのはの手ごと頬を押さえつけた。

「嫌な笑い方すんなよな」

「へ？」

「今の、っていうか家に着てからお前の笑い方、無理して笑っているみたいで気持ち悪かつたぞ。大人になったら必要なのかもしれないけど、今のお前は子供だろ。それに、俺は無邪気に笑っているお前が好きなんだ。だから笑つてろ」

なのははしばらくぽかーんと口を開けたまま呆然としていたが、しばらくすると急に笑い出した。腹を抱え、ずっと笑われると、さすがに恥ずかしいものがあつた。

しばらく笑い続け、息も絶え絶えになつたころなのははようやく口を開いた。

「……今の気持ち悪いつていう言葉ね、前るときアリサちゃんと喧嘩するきつかけの言葉だつたの。それがきつかけで仲良くなつたんだけど、悠斗君からもう一度言われるとは思つて無かつたなあ。それに……」

そこでなのははいったん区切るとすつと顔をこちらに寄せてきた。

「？」

「最後の言葉、プロポーズみたいだつたよ？ あんなこと言われた

の、始めてなの。ちょっとときどきしちゃったかも」

「つつ〜！！！！！！」

そう、優しく耳元でささやかれ、一気に赤面した。

今更ながらさっきの自分の言った言葉を後悔した。少なくとも最後のはやめておけばよかったと。

なのははごろごろと床で悶える俺を楽しそうに見つめると、えいと背中に抱きついてきた。

何かを言おうとしたのだろうか、顔を寄せたなのはとびつくりして振り返った俺との距離は一センチも無かった。そこでまたびつくりして硬直してしまった俺に向かってなのはがゆつくりと顔を寄せてきた。

何をするのかはわからなかったが、急に鼓動が大きく、早くなり俺もなんとなく目を閉じた、その次の瞬間――

「こほん」

「「っ！！！！」」

「あー、それよりも先は部屋を用意させてもらうよ。なのは君。それと、いかに聡明とはいえうちの息子は五歳だ。よからぬ知識を吹き込まないでくれたまえ」

小さく、それでいてよく聞こえるように咳払いした親父のせいで思わず俺たちは額をぶつけ合った。

あの後何をしようとしていたのかはわからないが、なんか邪魔されたという気分で親父をにらみつける。親父はくっくくと特別上機嫌のときにする笑い声を上げるとなのはに何かを忠告した。

それに対し、なのはは正座して真っ赤になりながら俯いた。俺たちの正反対の反応に親父はますます笑い声を大きくした。なんか負けたようでむかついた。

悠斗五歳。まだコウノトリを信じるお年頃である。

序章3 『特訓、特訓、また特訓』

――それでね、好きな人同士するのがキス。だけど、これは本当に好きな人じゃないとだめだよ？

――へー、じゃ、なのはやすずか、アリサとはしていいのか？

――ええつ、と、その、相手の人の許可を得なきゃだめなの。だからすずかちゃんやアリサちゃんはだめ。

――ふーん、ならなのはとならしてもいいのか？

――ふえ？ あ、えつと、その、ここじゃなけりゃ……

――真昼間から何話してんの？ あんたら

――あ、あははははは

昨日の事についてなのはに聞いていたら、なぜかアリサが呆れたような顔で近づいてきた。すずかは隣で苦笑いしている。

「よ、アリサにすずか。今日も元気そうで何より」

「……いつも思ってたんだけど、あんたってどこか抜けてるのよねえ」

「いつものギャップがすごいかも」

いつもどおりに挨拶しただけなのに、酷いこと言われてる。何でだ。

「あ、おはよー。アリサちゃん、すずかちゃん」

「……………」

「え？ な、なに？」

笑顔で挨拶したなのは親友二人に急に押し黙られてなのは首を傾げる。黙った二人といえば、不思議そうなのはの顔を見ている。

「なんていうか……………」

「あんだ、変わった？」

「ふえ？」

「なんか良い事でもあった？ 昨日より良い顔してるわよ、あんだ」

「うん、ずっとかわいくなっただよ。なのはちゃん」

「え、えーと」

なのはなぜか嬉しそうに言い淀みながらちらっとこちらを見る。それに釣られてこちらを見てくる二人に分からない、という

意味を込めて首を傾げる。

と、そこで隣のなのはが何故か怒り出して悠斗の足を踏んづけた。

「ぎっ!？」

「ふんっ、だ」

「あ、あははは」

「ま、悠斗が乙女心が分かかってないっていうのは理解したわ」

怒りながらも悠斗の側を離れようとはしないなのはを見てアリサが納得の声を出す。

小指を踏ん付けられ痛み悶える悠斗をすずかがよしよしと慰める。

そんないつも通りにぎやかに過ごす一日、なのははいつもよりも輝いて見えたそうだ。

なのはの事情を知ってから、俺の日常は少しだけ変わった。俺の家がちよくちよくなのはが遊びに来たり、それに釣られるようにアリサやすずかが来たり、はやてと図書館で遊んだりと、皆との距離が少し縮まったみたいだ。特になのはは抱えていた問題が解消されたみたいで、今まで以上に明るくなった。

ただ、親父と二人で「悠斗育成計画」とかいう怪しげなものを進めるのは勘弁してほしかった。

そして、一年半ほどが過ぎたころ、ようやく重力制御装置の七倍で気分が悪くならない程度になった時、ついに計画の第二段階とやらが発動した。

「喜びたまえ、悠斗君。ただいまをもって計画は第二段階へと移行するっ！」

「わー、わー」

背中にスポットライトを当て、花吹雪（本物）を散らせるという無駄に芸の細かい演出を見せてくれた親父に気のない歓声とおざなりな拍手を送ったが軽く無視された。

「第二段階の要となる装置はこれだっ！」

親父はくるっと回転すると、後ろに鎮座していた布で覆われた塊を指差した。すると、ばばーん、とどこかから効果音が流れると同時に、布がひとりではさあっ、と捲れ上がる。

「これが、私がある映画を元にして作った睡眠学習装置、名づけてあー、『睡眠装置』だっ！」

「いや、今作っただろそれ」

計画名と同様あまりにも適当な名前に思わず突っ込んだがいつものように無視された。

その装置とは、少し大きめなベッドの後ろからとてつもなく大きな円盤のようなものが生えていて、怪しげな光を発していた。

親父はキラキラと目に星を浮かべて全貌があらわになった装置を見つめながら説明し始めた。

「これは私が友人に頼められていた物のついでに、片手間で数時間かけて作った装置でー」

いきなり怪しいぞ。おい

「……これにはありとあらゆる武道の達人のデータが入っている。柔術、剣術、棒術、弓術、馬術、水術、薙刀、槍術、杖術、短刀術、鎖鎌術、分銅術、手裏剣、十手術、鉄扇術、鉄鞭術、居合・抜刀術、和術、捕手術、もじり術、しのび（隠形）術、砲術、と、武芸十八般及び空手、中国拳法やムエタイ、シラット、テコンドーなど実践的な武術の型から、陰陽術や戦術などの曰く付きのものまでを頭に詰め込むものだ。もちろん、型がわかっていても体が動かなければどうしようもないし、実戦経験がなくても体は動かないだろう。よって、第二段階は今までの筋トレは終わり、今まで通り重力制御装置の中でひたすら型の練習をするのみ。これはようやく悠斗の体の下地が出来たという事だよ」

しかしさっきの適当な出だしから一転、えらい本格的になった。

それに、世界一、とは言ったが、まさか本気で推し進めるとは思わなかった。

「正しい型が最初から分かっているのだから、それに近づければい

いだけで、上達は早い。重力制御装置の一面を全て鏡張りにしたら、それを見ながらやればいい。なに、本当ならここまで早く三年を見積もっていたのだ。大丈夫、悠斗は才能がある」

才能がある。それは確かなんだろう。体は鍛えれば鍛えるだけ答えてくれ、周りとは、いや大人と比べてもかなりの身体能力を持っていると自負している。なににより、親父が保障してくれているのだ。間違いない。

そういえば、強さを手に入れて俺はどうしたいのだろう？ 漫画とかじゃよく世界のためとか言って身を粉にして働くんだろうけど、俺はそんなの御免だ。母さんのため、確かにこれは第一目標ではあるけども、強さを手に入れた後、俺はどうなる、いやどうするんだろう……？

俺のそんな心の葛藤を読み取ったのか、親父がいつも俺を諭すときの顔になった。

「悠斗。今はただ我武者羅に強くなりたまえ。強さについて考えるのはある程度力を手に入れてから考えると良い。それに、本当の強さとは、真っ直ぐ前に進んでいけば自ずと見えてくるものだ」

そう、親父は俺の肩に手を置きながら言った。いつもながら親父の言葉は心に響く。今の俺なら本気で殴れば吹き飛びそうなのに、そんなひよろい科学者の親父がやたらと大きく見える。

たまにこういう顔や態度をとるから、この人は俺の憧れなんだ。マッドで、調子がよくて、すぐ俺をからかいたがる。およそ普通の父親とはかけ離れているけども、おれにとっては尊敬できる、最高の親父なんだ。

「本当なら後頭部にプラグを差し込んで脳みそに直接書き込む感じだったんだけどね。やってみたかったけどさすがに息子にはやらないよ」

でも、こういったマッドなところはどうにかしてほしいと思う。

こうして、たまに親父がマッドになったり、暴走したり、なのはと親父が二人で暗い笑みを浮かべていたり、やばい事もいっぱいあったけど、はやても含めた五人と、なのはのお母さん、お父さんで遊びに行ったり、はやての家ではやての作る拙い料理をご馳走になったり、アリサやすずか、はやての家でのお泊まり会に強引に参加させられたり、皆で親父のマッド振りを見に来たり、そこで何故かアリサと親父が意気投合したりと賑やかで、楽しく、幸せな日々は過ぎて行った。

そして、母さんが死んでしまって、強くなると決意した日から三年。俺はようやく八歳になっていた。

「くっそおおおおおっ！！！！」

俺は背後にいる人形に裏拳を叩き込み、肘でその後ろから襲い掛

かつて来る人形を吹き飛ばし、右斜めと左斜めから瞬間的に突き出される拳や蹴りを異常なまでの反射神経で捌ききり、回し蹴りで全方向から襲い掛かるうとしていた人形をまとめて吹き飛ばす。

しかし、そこで吹き飛ばした人形の陰から飛び出してきた人形に足を掬われ、もう一体に上空に向かって蹴り飛ばされる。

「ぐうっ」

痛みに顔をしかめるが、蹴られた箇所の手をやる暇もなく、飛び上がってきた人形の相手をする。人形の腹を蹴り、蹴り上げられる足を踏み台にしてさらに上にとび、天井を蹴って襲いかかるうとしていた人形を殴り飛ばし、左右から壁を蹴ってきた人形からの攻撃を捌ききれずに地に叩き落される。

わらわらと寄ってきた人形に周りを固められ、拳が一斉に突き出される。そこで――

「ストップ。三分四十二秒。うん、大分伸びたね、やっぱり最近やったあのトレーニングが効果的だったのかな？」

どうやって作ったのか、ふわふわと浮いているモニターの中の親父の言うあの修行とは、またしても親父が漫画を参考にして作った計画の第三段階の要の施設でのことだった。

解説すると、

レベル1

パンチングマシンが置いてあり、それを全力で殴るというものだった。すこしでも手を抜けばその力分のパンチ力が返ってくる。

地味に辛い物だったが、あらかじめ正しい殴り方を怪しげなマシンで習得していた俺はなんとかなった。要するに全力で攻撃をする特訓だった。こんなものかと思っただ俺が間違いだっただ。

レベル2

飛んでくる虫を捕まえるだけだが、重力の向きが三秒ごとに変わるため、虫の飛行に規則性を”把握”しないと捕らえることができない。相手の動きを観察する洞察力が必要な試練だった。これも、まあなんとか。

レベル3

部屋中に空いている穴から飛び出てくる矢の中にある一本だけ違う矢を見つけて出して切り捨てるといったものだった。矢の速度は150km/h。動体視力なんて関係ない速度に苦しむ事二十三時間ちよつと。最後の最後、攻撃してするのがターゲットの矢だと気づくのが遅かったかと思うとぞつとする。

レベル4

これが一番やばかった。幅15cm四方の台座に、片足で30分以上たつていられば、クリアー。意外と簡単、なんて思った俺が馬鹿だったとすぐに思い知らされた。四方八方から飛んでくる鉄球をかわしつつ30分保持しなければならぬ。途中で台座から落ちると、電撃を喰らい、最初からやり直しとなる。

電流自体はそこまで強いものではなかったが（気絶しない程度）、飛んでくる鉄球を見切る動体視力と反射神経、自分に当たりそうなものだけを瞬時に把握する能力。小さな台の上での身のこなし。正直、これまで習得してきたもの全てを要求される試練だった。

あれはやばかった……しかもあのマッド、制限時間は二十四時間で過ぎれば爆発って、ありえねえ。さすがマッド。

もし時間をオーバーしていれば部屋が潰れてぺっしょん。まさに命がけの修行だった。

「最初は3人で十秒ともたなかったのになあ。うん、よく成長したよ」

今戦っている人形だってそうだ。親父が性懲りもなく漫画の知識から再現した技術で、人形にワイヤー状の通信機のようなものを取り付け、この部屋に設置してあるカメラや、人形のモニターから送られてくる情報を瞬時にスーパーコンピューターが解析し、最良の情報を人形に送り続ける。

人形も、まるで人のように自由な稼動域を持っていて、スーパーコンピューターからの指示を忠実に再現する。

戦闘の組み立ても出来ず、フェイント虚実の見分けもつかない悠斗ではまさに瞬殺だった。

悠斗は何回も何回も負け続け、敗北から一つ、また一つと何かを得ていった。

フェイントの見分け方。どんな状況でどんな風に技を使えば良いのか。効率のいい体の使い方。ある程度の戦闘技術が身に付いた後、あの試練を受け、大幅にレベルアップした。

「……もう一回頼む。親父」

息子の成長に上機嫌なジェルに、悠斗は自分の手を見つめたままそう言った。

いま、悠斗の体を熱い物が駆け巡っていた。寝ながら反則のような感じで体得した技術だったが、今までは自らの未熟のせいで追いついてなかったのが、試練によって身に付いた動体視力と反射神経、それと体の効率のいい動かし方。それに泥にまみれた敗北から学び取った虚実の使い方。そこにあらゆる武芸の身のこなしが加わった時に、全てが繋がった。

まだ頭の中にある動きとは天と地ほどの差があるが、それでも自分の力が一つ、二つ上に上がったことが悠斗には嬉しかった。

「もうかい？ 休憩したほうが良いんじゃないのかい？」

「すぐがいいんだ。この感覚がまだ手にあるうちに」

ジェイルはそう言って力強く手を握り締める悠斗を嬉しそうに、そして少し寂しそうに見ると、頷いた。

「わかった。やるう」

その日、訓練室から電気が消える事はなかった。

序章3 『特訓、特訓、また特訓』（後書き）

とりあえず三本上げました。

一応投稿してあった分はほとんどそのままで行こうと思っていた
す。

序章4 『進む情操教育』

「それで、ジュエルシードがばら撒かれ、一人の少女が回収しに来るのがそろそろだったね」

「はい。フェイトちゃんっていうんですけど、彼女を助けたいんです」

「うん、それで、どういった風に動くかは決めたのかい？」

「ええ、それが、どうすればいいか分からなくて。あの時のフェイトちゃんはお母さんのためなら何でもしそうな感じだったし、私が何を言っても聞いてくれなかった。無理やり連れてきてフェイトちゃんが入心を入れ替えてくれるとは思わないし……」

「そうだね、そのあたりは心の問題だし、難しいところだ」

「うーん、と二人して悩みこんでしまう。 何故だろう。 親父

の唇が邪悪に曲がっているような気がする。

「そっぴや、前の時なのははどうしてたんだ？」

「え？ つと、あの時はただ我武者羅にやってて、ただフェイトちゃんも仲良くなりたくて、一生懸命だったから……」

「……なら、それでいいんじゃないのか？」

「ふえ？」

なのははそう気の抜けた声を出したかと思うとぽかんとこちらを見てきた。

俺としては何でそこまで驚くのが分からん。

「だって、前はそれで上手くいったんだろ？ 今回もそう上手く行くとは限らないけど、少なくとも打算で動くよりは心が伝わると思う。それに、なのははだってそのフェイトって奴騙したみたいで嫌だろ？」

「「……………」」

なんだそのおかしな物を見るような目は。

「悠斗君って、たまにすごいこと言うよね」

「まあ私の息子ながらたまに予想もつかない事をしてくれる」

なのはは少し嬉しそうに、親父はどこか誇らしそうに言った。褒めてくれるのは良いけどたまにって何だ、たまにって。

「でも、ありがとう。そういえば、前私が迷ったときもこうやって悠斗君に助けてもらったよね」

「そうだったけ？」

「そつだよ。五歳のころのことだから覚えてないかもしれないけど」

「……………いや、ちょっと覚えてるかも」

「本当!？」

いや、うる覚えなんだけど、何でそんな嬉しそうなんだ？

なのはの迫力に腰が引けながら頷くと、なのはがよかつたあ、とほっと一息ついた。その時のなのはの嬉しそうな顔に不覚にも一瞬ドキッとしてしまった。

「相変わらず仲がいいね、二人とも。うらやましいよ」

親父がいつも俺をからかうときののようにニヤニヤと笑みを浮かべながらなのはを見る。それに対してなのははべーっ、と舌を出している。……なのはって合計で30歳超えていたような。可愛いんだけど。

と、かわいらしく威嚇するのはをぼんやりと眺めていると親父が急にそうそう、とにやけ顔を消し、少しまじめな顔になった。

「今まで黙っていたけど、実は悠斗にも魔法使えるよ」

「……は／＼？」

「いやー、最初は悠斗には魔法のこと知らせないつもりだったんだけど、状況がそうも言ってられなくなってきたてねえ」

先に言えよこのくそ親父。

思わず大声で罵りたくなるのをぐっところえる。が、その必要はなかったようだ。

「なんでそういうこと先に言わないかなあ。ジエイルさん」

「あ、えーと、ぎりぎりまで黙っておいたほうが面白くなるかなあ
ーなんて考えてたんだ。うん」

「うん、お話ししようか」

「あー、お手柔らかにお願いしますよ」

いい年した親父がずーると八歳児に首根っこ掴まれて連行されていく。なんだかともつてもシユールな光景だ。っていうかなのは意外と力あるなあ。

扉一枚隔てた向こうから「それならそうと早く言つてよ！ 何かと理由つけて一緒にいられたのに」「はっはっは、実はそれを狙っていたのだよ。可愛い可愛い悠斗を貴様みたいな泥棒猫にはやれんっ………え？ もしかして本気にしたのかい？ 軽いジョークだよ、はっはっは。………あー、人体構造上肘はそつちに曲がらないと思ふんだ。あと手に持っている金槌をどうにかしてくれたらなあ、っ
て思ふんだが。あ、やっぱ無理かい？」なんていうやり取りが聞こえたかと思うと、ずごっ、どしゃっ、と人を硬いもので殴りつける音が続き、五分ほどたった後、なのはが頬に赤いものをつけて帰ってきた。

「親父は？」

「あの装置に入れてきたから大丈夫だよ」

「そっか。なら三十分ほど待つか」

「うんっ」

このやり取りはなのはと親父が同盟を組んだ時から週一のペースで続いている。……そう、親父はまさに命がけでなのはをからかい続けている。最近ではなのはも容赦がなくなってきた、命の危険を感じた親父が三十分でどんな怪我でも完治するとかいう出鱈目な装置を作り出した。

しかしそれがなのはの折檻に拍車をかけていると親父はなぜ気づかないんだろう？

「ほら、また頬についてる」

「え、どこー？」

「ここだよ。ほら動くなって、拭いてやるから」

毎回血を付けて帰ってくるなのはの頬を優しくぬぐってやる。毎回回付けてくるのでわざとやってるんじゃないだろうか、とも邪推したが、嬉しそうなのはを見るといつもまあいいかっていう気持ちになってくる。

やる事が無いのでひまだなー、と机に身を投げ出す。

「そつだ。悠斗君の魔法指導は私がやることになったから」

「ん、そつか。よろしく頼む」

俺の身近にいる魔法が使えるのってなのはぐらいだったからそんなに驚かない。ふあ、と大きなあくびを一つ。

それを見たなのは何を思いついたのかいそいと近寄ってくる
と、俺の隣のソファ―に座ってぼんぼん、と膝を叩いた。

「眠たいんでしょ？ 膝貸してあげるから」

「んー、なのはが辛いだろ？ 重いし」

「いいから」

辞退しているというのに、なのはは俺の肩を掴むと、引き寄せて
きた。

ぼすん、となのはの膝に後頭部を埋める形になる。

上を見上げると何が嬉しいのか、満面の笑顔のなのは。嬉しそう
なのはの顔を見ながら、目を閉じた。

「
」

「いやー、嬉しそうだね、なのは君。ほら見てみなよこの笑顔。可
愛らしいとは思わないかい？ え？ 写真とデータを渡させて？
そりゃー無理な話だよ。これから悠斗に見せるつもりなんだから」

目が覚めるとなのはと親父が壮絶な追いかけっこを広げていた。
親父が捕まり、いつものように折檻を受けている間、暇だったので
枕元においてあった封筒の中の写真を見してみる。すると、なのはが
俺を膝枕している写真が写っていた。

そのなののは微笑があんまりにもきれいだっただので思わず部屋に飾っておいたが、後日部屋に来たなのはに真つ二つに引き裂かれたのは残念だった。

親父特性のデバイスを携えてなのは先生の魔法教習をはじめて三日。俺の資質を見たり、基礎的な魔力運用の特訓をして、さあいよいよ魔法を使うときが来た。

「それじゃ、やってみて」

「ああ」

ちなみに、俺が装備しているのはグローブ型のストレージデバイスというやつらしい。剣や槍などにも変形できるらしいが、それをするオプションを付けていないし、何よりまだ俺の動きが頭の中のものに追いついていない。これまでの特訓でなんとか体術だけは形になったので、グローブ型にしてもらった。

掌を突き出すようにして、丹田の上辺りにあるリンカーコアに集中して魔力を引き出し、掌に集める。

術式が編みであるグローブを介し、深緑色の魔力で出来た魔力弾が生成された。

「……おお、すげえ」

所用した時間は八秒。とても実戦で使える速度ではないが、魔法を使えたということが大きかった。

が、一度なのはにやってみたら、瞬きするような速度で十数個の魔力弾を一瞬で生成していた。しかし、そんなことをしておいてまだ本人は「リンカーコアが未熟だからこれぐらいしか出来ないんだけどね」とおっしゃられた。俺からすれば十分化け物だ。

ちなみに俺の魔力資質はそこそこあるものの、放出するのが極端に苦手で、普通の魔導師として大成するのは難しいそうだ。

その代わり、肉体強化とか、肉体を活性化させ自然治癒を早くするなど、肉体系には強いらしい。あと、空も飛べるらしい。

「うん、それじゃあ一回模擬戦をしてみようか」

「はあ!？」

魔法戦闘にかけては百戦錬磨のなのはとたつたいまようやく肉体系以外の魔法を成功させた俺が勝負って、いじめにしかならないだろう。

「あ、大丈夫。私は肉体強化の魔法しか使わないし、シールドも使わないから」

「は？ そんなんでいいの？」

確かに、実際の八歳児よりはるかに体力のあるのはだが、親父のめちゃくちゃな鍛錬メニューをこなしてきた俺に到底敵うとは

思わない。

「うん。別に私だって砲撃魔法しか使えないわけじゃないよ？ 少なくとも新人の子達になら三対一でも余裕だったし」

「でも、俺も結構鍛えてるぞ？」

「あははっ、いくらなんでも八歳の悠斗君には負けないよ」

そういつて笑うのはに、ちよつとむかつときた。ふっふっふ、近接戦闘ではどちらが上か思い知らせてやる。

「それじゃ始めるよ？ どこからでもかかってきていいよ」

その声を聞いたとたん、俺は肉体強化の魔法を使わずに飛び出した。

丹田から気を練りだし、足裏で爆発させるようにして走る。十メートルほどあつた距離を瞬きする時間で詰める。

「っ!？」

不意を突かれても反応してくるのはやはりさすがとつぶべきか。しかし、突き出された拳を瞬時に見切りわずかに顔を傾けてかわし、そのままその腕を取って一本背負いで叩き付ける。もちろん、無駄に衝撃が体にいかないように手加減はしたが。

「きゃっ」

素早くマウントポジションを取って膝で肩を押さえつけながら拳

を突きつけた。

何が起こったか分かっていない様子なのはにどうだ、と快心の笑みを見せた。

しばらくぼかーんとしていたなのはだったが、急に顔を真っ赤にして慌て始めた。困った風にちらちらとこちらを見るのはに、なんだろう？ と首を傾げたが、一瞬後にその理由に思い立ち、慌ててその場から飛びのいた。

こちらをうーっ、と恨めしげに見るのはになぜか意味も無く正座してしまう。

「あー、なのはさん？」

「……むーっ」

なんか怒ってる？ いや、拗ねてるのか。にしても何でだ？

あれか、やっぱ八歳児に負けるのはなのは的にアウトだったとか？

「……いいところ見せたかったのに」

「え？ なんて？」

「……なんでもないっ！ それよりも、悠斗君、どこであんな動き習得したの？」

「いや、だから鍛錬して」

「だからどうやって!? 悠斗君ぐらいであんな動き出来るなんて普通じゃないよ」

たった一人で世界征服出来そうなのも普通じゃないがな。

「そりゃあもちろん親父のいい加減な発明品で……」

あ、しまった。

「ふ、ふふふふ。そう、ジェルさんが」

すまん親父。冥福を祈る。

第一話『親父はマッドサイエンティスト』

「ふっ、はっ、やあっ」

手に持った棒を突き、薙ぎ、切り払う。一呼吸に三動作を一気に
行なう。

持たば剣、突かば槍、薙げば薙刀。棒術は使いようによれば近接
戦闘のほとんどの距離をカバーできる。また、基本動作が槍術・剣
術・薙刀術の操法と共通項がある事が多いことから、それぞれの基
本を掴むために悠斗は獲物を持った鍛錬の準備運動に棒を用いるこ
とが多かった。

また、悠斗の動きは、この歳ですでにかなり洗練されていた。あ
りとあらゆる武術家の理想といえる動きがわかつていたので後はそ
れに体に乗せるだけ。とはいえ、本来一生をかけて極めることも難
しいといわれる武術をそう簡単に極めることなど不可能。実際反則
技を使っている悠斗も、自分の理想とかけ離れた動きしかできない
現状に齒がゆい思いをしていた。

「へえ〜」

とはいえ、棒が分裂するような勢いで棒を自由自在に操る姿は、
なのはの家族が使っている剣術と劣らず完成されているように見え
た。

真半身に構えた状態から時に突き、時に切り払い、時に薙ぐ。し
かも棒を使うだけでなく蹴りや肘なども使っている。しかし、なの
はにとつては目にも止まらない動きなのに対して、悠斗が戦ってい

るシャドーにとってはなんてことはないのかもしれぬ。悠斗はシャドーが繰り出す攻撃を何とか避けているという感じだった。

シャドーに向かって棒を連続で突き付ける。刹那の時間に繰り出される神速の突き。しかしそれはすべて相手の手の甲で逸らされ、しかも棒をつかまれた。

驚く暇もなく、掴まれた棒を利用して、小手返しの要領で投げられる。

地面に体が突く前に何とか体制を整え、足が地面に突くと同時に後ろに飛びのいた。しかし、相手はそれを超える速度で悠斗の懐に飛び込んできた。

自分の鳩尾に拳を突きたてられるイメージでシャドーとの模擬戦は終わった。

自分の悪かった点などを思い返してため息を吐く。

悠斗は今、この無手のシャドーに一回も勝てたことはない。相手は自分と同じ身体能力。しかし、その動きは悠斗が理想とする動き。いまだ自分と理想の動きとは差があるのを感じ、ため息を吐いた。

剣道三倍段という言葉がある。剣に限らず獲物を持った相手に無手の者が対等に勝負するには三倍の力量がいるということだ。力やスピードは変わらないのに技だけでそれほどの差がついているという事実、先は遠いな、と悠斗は嘆息した。もちろん、諦めるつもりなど毛頭ないが。

気持ちを入れ替えて、本格的な鍛錬をするため重力制御装置を入

れよつと思い、なのはに退出するよう声をかけよつと、振り返った。そこに、一区切りついたのを感じ取ったのかなのはが駆け寄ってくる。

「凄い、悠斗君、すごいよー！」

しかし、それに対し、悠斗は首を傾げるしかない。凄いやわれでも、自分がどのくらい凄いかを理解していないからだ。当然、自分がどれほど恵まれた環境にいるかは悠斗も理解している。スタートからすでにゴールは見えている。後はそこに向かって突き進むだけ。壁や障害があっても、先を見失うことは無い。

が、それゆえに悠斗は自分の凄さを認識していなかった。比較対照は常に理想の動き。他流試合というのもしたことが無く、実践と言えるのも人形とだけ。純粋な武術という枠組みでなら悠斗はすでにかなりの領域に達していることを知らなかった。

それゆえにこう言う。

「そうか？」

「すごいよ。だってほとんど何してるのかわからなかったんだもん」

実際、悠斗の魔導師適正は低くとも魔力量はそこそこある。空も飛べることから、インファイターとしてなら管理局でもトップだろう。昔の自分の教え子を思い出し、思わず比べてしまう。

実際、鼻肩目なしでかなり良い勝負をするだろう。もしかしたら勝つかもれない。相手が切り札を出せばわからないが、素手の格

闘なら圧倒的に悠斗がリードしていた。

「じゃ、魔法訓練に移ろうか」

「えっ！？ 準備運動が終わったばっかなのに!？」

「ええっ!？ あれが準備運動!？」

二人とも、違う意味で驚いていた。

「くくく、くつくつく、はっはっはっはっは」

「あゝ、スイッチ入っちゃってるな」

「どっしりよっ?」

悠斗があの後、重力付加八倍で頑張り、なのはとの訓練から帰ってみると、ジェイルがマッド全開で高笑いしていた。それ自体はたまにあることなのでそんなに気にしないのだが、問題なのはその後。大抵ろくでもない発明品に付き合わされる。

「くつくつく、おや、帰っていたのかい。二人とも。見てくれたまえ。この発明品を!!!」

すぐさま踵を返して逃げ出そうとした二人だったが、寸前で見つかってしまふ。渋々ジェイルのほうへと向かう。

そして、そこにあったのは普通の腕輪だった。

「あゝ、っと。これがどうかしたのか？ 親父」

「ただの腕輪みたいだけど」

「ふっふっふ、聞いて驚いてくれたまえ」

驚くな、じゃないのか。

「これはAMFを発生させる機械を縮小したものだ。例えば、ほら」
アンチマジックフィールド

親父が腕輪をつけて自ら作り出した魔力弾に向かって手を近づけると、魔力弾がばらばらになって消えた。

それを見て目を見開いて驚くなのはに親父は胸を張って言った。

「どうだい？ 悠斗はインファイターと聞いたから作ってみたんだよ。これさえあれば相手のシールドの構成を緩くして一撃で破ることも可能なはずだ」

親父は腕輪をはずすと、俺に手渡してきた。

「へ」

俺は受け取った腕輪をとりあえずはめてみた。ぴったりだ。って
いつかよくはめれたな親父。

「ん？ 気づかなかったのかい？ その腕輪は対象者の腕に合わせ

て大きさを変えるんだよ」

相変わらず出鱈目なことをしてくれる親父だ。便利すぎるだろう。

「で、具体的にはどう使うんだ？ 自分の魔法も消しちゃうのか？」

「いや、そんなことはない。なに、簡単さ。ただ腕輪をかざして無効化した対象を認識しさえすればいい。後は勝手にやってくれる」

「ふうん」

便利だな、と腕にはめた腕輪を見ていると、説明に聞き入っていたのはがようやく動き始めた。

「そんな便利な装置が……」

「もちろん、なのは君の話に聞いたスターライトブレイカーとか、デイベインバスターぐらいの砲撃魔法になれば完全に無効化するのは難しいね。少なくとも、他のみたいに叩けば壊れるというふうにまではいかないだろう」

当たり前だ。そんなことまで出来たら魔導師の意味がなくなってしまう。

しかし、聞けば聞くほど俺にぴったりな装備だ。近づくまでに厄介な射撃魔法を無効化できるのは大きいだろう。だが、これをもらってまだ距離を置いたなのはには勝てそうにない。

「これがあれば悠斗君でもフェイトちゃんに勝てそう……」

ポツリと漏らしたなのはこの言葉。これがまずかった。

なのはの言葉を聞いた親父がぼん、と手を叩いた。

「そうか、その手があったか」

「は？」

「どうだい？　なのは君。今回の件、悠斗に一任してみるといっつのは」

「えっ、えええええええー！！！？？」

俺も叫びたかったのになのはに先を越された。っていつか何で俺よりもなのはのほうが驚いてるんだ。

「でっ、でも、危ないし」

「君がサポートしてあげればいい。それに、今の悠斗よりも弱かった君が成し遂げてるんだ。不可能じゃない」

「うっっ」

なのははうまく親父に言い包められてしまい、援護は期待できない。っていつか最初は俺傍観者だったはずなんだけど？

「あほか親父。元々これはなのはが友達と、いやフェイトって子供と仲良くなりたいたいから始まったんだろ？　何で俺がフェイトって子と戦うんだよ。逆だろ、逆」

なのはが戦い、俺がサポートもとい傍観する。これがベストなはずだ。男の俺が隣で見てるっていうのも情けない話ではあるが……まあ適材適所だろう。

と、いうわけで頑張ってくれなのは。

「う、うん。もちろんそのつもりだよ」

「良かったのかい？　せつかくお姫様を守る騎士ナイトっていう構図だったのに」

「！　~~~~っ、いいの！　！」

なぜか一瞬、しまったという顔をしたなのは、ニヤニヤしながら見ている親父を怒鳴りつけた。

ま、それはともかくとして。

「で？　そのジュエルシールドとやらが来るのはいつなんだ？」

「あ……明日だ」

しまった、なのはは意外とすっかりなの忘れてた。

第二話『忘れられたマスコット』

『助けて……だれか、助けて……』

ぴりりり、ぴりりり、ぴっ

目覚まし時計がなると同時に覚醒し、腕を横に伸ばしてアラームを止める。まだ眠気が残る頭をバリバリと搔いて眠気を吹き飛ばした。

「変な夢だったな……」

SF映画にでも出てきそうな民族衣装に身を包んだ少年が謎の化け物と戦い、散々にやられて敗北する面白みのない夢だった。

そういえば、なのはの言っていたフェレットの夢を見るはずだったのに、どうなっているんだろう？

なのはの説明不足でそれがなのはの言っている夢だったことに気づかない悠斗。一応家で預かることになってるんだし、どんなのか見てみたかったなあ。と思いつつ、朝の鍛錬をしに部屋を出た。

朝日が顔を出したばかりという早朝の中、重力制御装置の部屋の真ん中に悠斗はいた。重力付加は、今自分が耐えられる最高値よりも下の五倍。今でこそ少し辛いかな、という程度にまで抑えることの

できたが、慣れるまでは大変だった。

常人ならば悲鳴を上げて気を失う空間で、悠斗はただ静かに座禅を組んで集中していた。

丹田からあふれ出る気を体中のチャクラを循環させて増幅させていく。

ムーラーダー、スヴァーデー、ヌザダー、アナーハタ、ヴァインユダー、ジュニマサハスラー
会陰、陰部、腹部、胸部、喉、眉間、頭頂と各部にあるチャクラを通して最初に練り上げた気を数倍、数十倍に増幅していく。

「く……」

つう、と悠斗の米神から汗が垂れる。気を増やしていくにつれ、悠斗の汗の量はどんどん増えていく。額にぽつぽつと粟ができ、それが顔を伝って床にしみこんでいく。

「はあー、ふうー、はあー」

大きく深呼吸を繰り返しながら人間というちっぽけな器に納められた気を外に吹き出る寸前まで高めていく。体の各部に存在するチャクラが身に余る量の気に悲鳴を上げている。

体が熱い。まるで周りを溶岩で囲まれているような、いや血潮の代わりにマグマが流れているようであった。

つ、と汗が顎を伝い、床に染みをつくっていく。服は汗でずっしりと重く、へばりつくがそんなことは気にならない。

「ぐう、あ……」

呼吸を整えようと思ってもそれは叶わない。喉が呼吸器官としての役目を果たしていない。

ぎりぎりまで増やした気を少しずつ、少しずつ丹田へと収めていく。収めきれないものは体全体の細胞に刷り込むようにして馴染ませていく。常日頃からこうすることにより、体を気に慣らさせていく。

しかし、一歩間違えれば大惨事なこの修行でも、増える気の総量は全体から見ても僅か0.1%にも満たない

遠く、険しい道のり。しかし悠斗はくじけなかった。父の言葉を信じ、自分のやってきたことを信じ、一歩、一歩と間違えることがないようただただ前を見据えて精進していくだけだった。

「すうー、はあー……よしっー！」

荒れた息を整え、気合を入れなおすと悠斗は日課の続きを行った。才能もあるだろう、恵まれた環境もあるだろう、しかしそれに甘えず努力を怠らない悠斗は着実に力をつけていった。

「おはよう、悠斗」

「ああ、おはよう……って、なにしてんの？ 親父」

鍛錬を終え、顔を洗い、歯を磨いて、朝飯を作ろうとしたところ、親父がまだ研究室で何か作業をした。いつものことながら溜息を吐く。また徹夜しやがったなこの親父。

「で？ なにそれ。新種の車なんか？」

無駄だと思うけど聞いてみた。今親父が弄くっているのはおよそ実用性のない丸いボディをしたSFに出てきそうなカラフルなデザインの乗り物だった。

横から何かに貫かれたかのような大きな穴が開いていて、機体はべこべこに凹んでいた。

「いや、これは宇宙船だよ」

ほらみる。

「昨日に、はやて君の、夜天の書を、直そうと、いろいろ弄くってたんだけど、ねえっ」

よいしょこらしよと機体のパーツを取り外しながらしゃべるのは辛そうだ。ひょいっと片手で持ち上げてやると親父はありがとう、という続けた。

ああ、そうそう親父の渡す薬のおかげではやての足はそこそこ健康だ。こないだ知ったんだが、母さんもはやてと同じような症状だったらしい。はやてのよりももう少し軽いものだったみたいだな。

あれから親父はその薬を完成させたらしく、それをずっと服用し

ていたはやては今で動けるようになった。……なんていったかなあ、魔力補充薬？ だったか。

来月からは学校に行くし、家か、事情を知った高町家で養子に迎え入れるという話も出ている。それを聞いたはやてが泣いちゃったんだけど、みんなで慰めるとさらに泣いちゃったのは記憶に新しい。

しかし、それは根本的な解決にならない。となのはとの相談の元、大本である闇の書もとい夜天の魔道書を弄くることにしたらしい、が。

「いや、私もなのは君も監視がいたことを忘れていてね」

「このくそ親父っ！」

どじでおっちょこちょいななのはならまだ分かる。だがいい歳した大人であるあんたが何やってるんだ。

「はっはっは。いや、問題はない。報告に行こうとして、こんなこともあろうかとわたしが管理局対策として飛ばしておいた迎撃用の衛星にワープに入る前に落とされたらしい。現にそれはここにある」

あれ？ 迎撃の衛星があるのになんでこれはここにあるんだ？

「そっか。それならいいんだけど……って、それに乗ってた人は？」

「ああ、私が行ったときにはすでにいなかったよ。しかし、この出血量から見て当分は身動きできないだろうね」

親父がびっ、と壁面のスイッチを押すと同時に、前の壁が開いて

いく。それと同時に鼻につくのは鉄臭い匂い。

親父の作ったシミュレーションで戦争やらなんやらを実体験したが、やっぱり本物は違うということを実感。胃がひっくり返りそうになるのを堪え、中を見る。

一人乗り用らしく、一つしかないコックピットにはおびただしいまでの血が付着していた。

「っ……」

俺の様子を見かねてか、親父はすぐに扉を閉めてくれた。ちくしように、今日は朝飯食えそうにない。

「悪かったね。もう大丈夫だと思っていたんだが」

いや、これはいかに体験プログラムで本物と大差ないとはいっても、実物との差を考えてなかった俺のミスだ。

そう首を振って示した。

「そうかい？ ……とりあえず、当面の間の安全は確保された。なのは君の話でははやて君が覚醒するまでは緊急事態がない限り戻ることはなかったらしい。これを見て、どんなに早くても一年くらいはかかるだろう。その内に準備を進めておかなければ」

なんかもうすでになのはに聞いていた話とだいぶ違うんだけど。ま、いつか。

なんとかなるだろう、と結論付けて作業を一区切りさせた親父と

朝飯を食って（俺は牛乳だけ）学校に向かった。

「……あー、今なんて言った？ もう一回頼む」

「だーかーらー。その変な男の子がユーノ君なんだってば」

「は？ だってお前の話じゃあ、そのユーノってというのはフェレッツトなんだろ？」

「え、あ、うーんと。そう、かな？」

納得しちゃだめだろそこは。

あれー？ と首をひねっているのはにチョップを落とす。なのはは叩かれたところを手で押さえ、いたいー、と涙目で睨んでくる。残念ながらかわいらしいだけで全然怖くなかった。

「何の話かわかんないけど、夫婦漫才やってないで行くわよ」

一部始終を見ていたアリサが、あきれた風に言うと、スタスタと先に行ってしまう。

「あ、待ってよアリサちゃん」

ぱたぱたと走って行くのはを見て、こんなどじっ娘でこの先大丈夫か？ とつい思ってしまった。すずかも同じ心境だったらしく、

二人して顔を見合わせると苦笑し、先に行ってしまった二人を追いかけた。

そして時刻は流れ、夕方。

さすがに友人が襲われるのは見過ごせないのか、話に聞いていた念話が届く前になのはが迎えに来た。

なのはは親父に軽く顔を見せると、嬉しそうに夜の街へと俺を引っ張っていった。

「えへへー、こうやって二人っきりで夜の街を歩くのってなんだかどきどきするね。悠斗君」

「ん？ ああ、そうだな。誰もいないところを歩くのって肝試しに似てるかもな」

「……………」

ぶくー、と頬を膨らませてじと目で睨まれる。ん？ と首を傾げると、なのははぶいっとそっぽを向いてしまった。

「えーっと、なのはさん？」

さっきまで上機嫌だったのに、なぜか急に不機嫌になってしまったなのはに思わず手を伸ばすと、その手を引っつかまれ、そのまま

がしつ、と胸に抱きこまれた。

試しに軽く引つ張ってみたが離してくれそうもない。そんな状態にもかかわらず、なのはは頑として目を合わせようとしない。とりあえずこうなつたなのはは放っておくに限る。手に当たるやわらかい感触や、甘い香りを気にしないようにして、悠斗はユーノがいるという病院へと向かうことにした。

歩くこと数十分。ぼんやりとレイジングハートってどんなんだろ？ とかデバイスなしであればならデバイス持ったのははどうなるんだろ？ とかくだらないことをつらつらと考えていたらそろそろ着きそうだった。

なのはは声をかけようとすると、いつの間にもやらなのはは不機嫌じゃなくなっていた。むしろ上向きに修正されていた。まあ機嫌が良くなつたのはいいんだが……

「えへへー」

俺の腕に顔をうずめ、蕩けそうな笑みを見せるなのは。そのあまりにも無防備な笑顔に俺はつい赤面してしまった。

「みゆ…うん…ふふふ」

俺が見ていることなど気づいた様子は見せず、なのはは嬉しそうに、幸せそうに、頬を緩める。なのははたまにこういう風に暴走状態になる。それは辛い過去から来るものなのかもしれないし、なのは自身本来甘えたりやな性格を押し殺した反動なのかもしれない。

「じゃ？」

思わずその柔らかかそうな髪に手を伸ばす。髪を乱さないようにそっと撫でると一瞬きよとしたのはだったが、次の瞬間には嬉しそくに破顔した。

自分の隣で幸せそうにしているなのはを見てみると、悠斗のなかに強い感情がわきあがってきた。それが何なのか、まだ悠斗にははっきりと理解することは出来なかったが、大切にしようと思った。

それに、前から言っていたなのはの好きな人とももうすぐ会える。本人は恥ずかしがって言わなかったが、おそらくなのははフェイトっていう子を好きなんだろう。普段の言動からもそれは伺えるし、なのはが口を滑らせたことにより発覚した一緒にベットの寝てた、っていうのは間違いない恋人のそれだろう。親父がストレートに口に出して折檻を受けていたけど。

……実は、俺の初恋はなのはだったんだが、その事実を知ってからは諦めた。しかし、世間からは冷たい目で見られるだろうけど、せめて俺だけは祝福してやろう、と心に決めた瞬間でもあった。

しかし、普段口ごらの行動を見たらなのはが俺を好きなんじゃないか、って勘違いしそうになる。今だってそうだ。事情を知っている俺だからいいけど、どこの誰にでもこんなことするんじゃないぞ。

知らぬ間に手が止まっていたせいか、なのはがなみだ目で見上げてくる。よしよし、俺はちゃんとわかってるからな、安心しろ。

それから病院に着くまでずっとなのはは頭を撫でられながら何かに葛藤しているようだった。

「（なんだろう、何か言わなきゃならないような気がするんだけど……あー、頭撫でてもらうの気持ちいいし、なんかどうでもよくなってきた……って、それじゃだめだって、ちゃんと悠斗君にいわなきゃ……ふみゃ〜）」

頭を撫でているうちに猫化したなのは。

しかし、レイジングハートをもらった後の戦闘は何か言いようのない衝動を発散しているようだった。

「デイバインバスター！ デイバインバスター！！ デイバインバスター！！！！！！！！」

「きゅ〜」

あ、ジュエルシードだったものを見て、ユーノが気絶した。

第二話『忘れられたマスコット』（後書き）

復活しました。takayaです。楽しみにして下さっていた方も、そうでない方も、見に来て下さってありがとうございます。

とりあえずはもうひとつのほうに力を入れて執筆しようと思っているので、こちらは不定期更新になるかも、です。身勝手な理由からですがご了承ください。

第三話『綻び始めた物語』

あれから一息ついて、今はみんな悠斗の家に来ていた。ちなみに、ジュエルシードの封印作業については全く問題なく終わった。これでとりあえず今日は終わり、のはずだったのだが……

「不時着？」

「ええ、そうです。この、ジュエルシードというロストロギアは僕が発掘したものなのですが、運送中に動力部が壊れてしまつて。それでここに落ちるときの衝撃で封印が解けてしまい、この町全体にばら撒かれてしまつたんです。これについては完全に僕の不手際です。こんなことに巻き込んで本当にすみませんでした」

ユーノは軽く事情説明をした後深く頭を下げた（ちなみに今は少年モードである）。

しかし、何の反応も返つてこないことに不安になり、恐る恐る頭を上げてみれば、そこには難しい顔をしたなのはの姿が。

「すまない。ユーノ君といったね？ その動力部の故障は外部からの衝撃とかで？」

「いえ、あの船は僕の一族が長年使っていたもので、そろそろガタが来ていたんです。今まで飛んでいたのが不思議なくらいで、この発掘が終わつたら買い換える話も出ていたんですが……それがどうかしました？」

なのはの代わりに親父が質問するも、返ってきたのは思わず納得

するしかない理由を伴った返答だった。しかし、これではおかしい。

「（なあ、これって本当はフェイトのお母さんが原因なんだったよな？）」

「（うん、そうだったはず、なんだけど……）」

一応なのはに確認を取ってみたが、本人も困惑しているとはいえ、しっかりと肯定が返ってきた。

ひそひそと話す俺たちを置いて、一人平然とユーノと会話を続けていく親父。親父もなのは言うシナリオとの誤差があり、多少なりとも戸惑っているはずなのにそれを微塵も表には出さない。それどころか楽しげな笑みすら浮かべている。大人の余裕というか格の違いというか、そういうものを見せられたようで少し悔しかった。

「そういえばさっき言っていたロストロギアというのはなんだい？」

「あ、そういえば説明していませんでしたね。ロストロギアというのは現在では再現できない技術、所謂オーバーテクノロジーで作られた遺物の事を指します。ロストロギアは危険で、扱いが非常にデリケートなので、時空管理局という組織が主に管理しています」

「管理局というのは？」

「管理局とは、数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関で、他にもロストロギアの保管等様々な事を行っています」

「なるほど……」

親父の質問に対して、ユーノは流れるようにすらすらと答えていく。

ちなみに、ユーノには親父がこの世界の技術者という事で説明してある。そして俺がその息子でなのはが幼馴染。

当然魔法なんてものは知らない設定になっているので、こうして重要そうな単語に対しては突っ込みを入れているというわけだ。

「それで、これから君はどうするのかね？」

「えっと、この町全体に散らばったジュエルシードを確保したいと思います」

「出来るのかね？ 君に」

「やってみせます」

親父の探るような視線にユーノはまっすぐな目で答える。

親父はユーノの目を数秒じっと見つめると、ふっと笑い口を開いた。

「そうか。ならばこの二人を連れて行きたまえ。きっと役に立つだろう」

「はい。ご協力感謝します……？ って、ええ！？」

あまりにさりげない親父の行動にユーノは一瞬気づかなかっただけ。慌てふためき親父に食って掛かる。

「聞いてなかったんですか!? ロストロギアはきわめて危険なもので、素人が触っていいものじゃないんです。それに、二人をわざわざ危険に巻き込むなんて……」

「そうは言っても、すでに二人は巻き込まれている。そして、この二人、特になのは君は一度関わって見て見ぬ振りをしていられるような性格じゃない」

「そうだよ、ユーノ君。それに、放っておいたら危ないんでしょ? なら、なおさら手伝いたい。これが私の気持ち。もちろん悠斗君も同じ」

なのはは自信満々に言い切り、ね? と同意を取ってくる。俺の事を信じて疑わない瞳。それが少しくすぐったくて、嬉しくて。それを隠すように苦笑すると頷いた。

それに、これは嘘じゃない。なのはだって本気でそう思っているだろうし、俺だって鳴海の町が壊れるところなんて見たくない。アリサやすずかに危害が及ぶ可能性もある。そんなのはなのはも俺もいやだった。

「なのは……」

ユーノは力強く言い切ったなのはに感動している。確かにその気持ちは俺もわかる。なのははなんていうか、物語の主人公みたいなやつだ。それは過去の話聞いてもわかる。

世界を救った英雄「高町なのは」。彼女が何故二十代半ばで命を落としたのかはよく知らない。親父は知ってるみたいだったけど、

なのは俺にはどうしても教えてくれなかった。

「ま、こういうやつなんだ。諦めてくれ」

「あ、はい。……正直助かります。実際のところ、僕一人じゃあ手に終えそうになくて」

やっぱり無理していたんだろう。明らかにほっとした雰囲気を一ノから感じる。

隣のなのはからは、無理しなくてもいいのに、まったく。思っているのが伝わってくる。微妙な空気の変化で相手がどう思っているかが分かるというのはそれだけ仲が良くなった証拠だ。それを感じ、悠斗はなんとなく嬉しくなった。

「うんうん。とりあえず、なのは君のご両親には私のほうから事情説明に向かわせてもらうよ」

「ええっ!?!」

「うん？　もしかして、内緒でするつもりだったのかい？　心配をかけるし、ちゃんとした説明はしておかなければね」

……やべえ、親父がちゃんとした親やってるのって、本当に久しぶりなような気がする。

最近の親父といえば、マッド全開で怪しげな機械作ったり、その実験台に俺を使ったり、俺をからかって遊んだり、命がけでなのはからかってぼこぼこにされたり……見た目十歳に満たない幼女にぼこぼこにされる中年ってどうよ。

「うう……はい。わかりました」

さすがのなのはも、真面目に正論で説く親父には逆らえず、渋々頷いた。

「うん。それじゃ、今日はこれにて解散。また明日にするとしよう。悠斗、なのは君を送って行ってあげたまえ。ああ、ユーノ君は家で預かることになったから、ゆっくりしていくといい」

「何から何まですみません」

「わかった。じゃ、いつてくる」

ソファーから一旦立ち上がってなのはに手を伸ばす。なのはは俺の手を自然に取った。

その違和感のない、流れるような一連の動作を見て、またしても親父がニヤニヤし始めた。

ああ、お決まりのパターンが目に見えよう。それにしても懲りないなあ、親父。

静かに黙禱を送る俺を置いて、なのはがすたすたと親父のほうへ歩いていく。

「ふふ、なかなか自分好みに育ててるじゃないか、なのは君。逆光源氏計画は順調のよ……ぐふっ!？」

「黙ってなさい」

「はい」

いつもどおりからかおうとした親父に、なのはからは腰の入ったいいパンチと底冷えのするような冷たい声と共に浴びせられ、さすがの親父も沈黙した。

「いごう、悠斗君」

「ああ」

何事もなかったかのように部屋から出て行く二人をユーノは震えながら怯えた目で見送った。

「いいかい、ユーノ君。これからいくつかここで住むにあたって注意事項がある。文化の違いなど、戸惑うことも多いだろうからそのときは気にせず質問してくれたまえ」

「はい」

今は、なのはを無事家に送り届けた後、ユーノと今後のことについて色々と話し合おうとしているところだ。

「まず、私の研究所には入らないこと。もし不慮の事故が起きたら命の保障は出来ない」

「そ、そうなんですか……」

「そして、家の離れにある建物にも入ってはいけない。下手すれば入った瞬間にぺちゃんこになる。実際私が経験済みだ」

「……気をつけます」

「そして、これが一番大事なことなんだが、悠斗に危害を加えないこと。これが大原則だ」

大人しく説明を聞いていたユーノも一つ目、二つ目と説明を受けていくことに頬を引きつらせていく。しかし、三番目の説明を聞いて、怪訝そうな顔をした。

「は、はあ……一番目と二番目はまだ分からないでもないですけど、最後のは……？」

「うん。まず、悠斗に手を出したら命はないものだと思ったほうがいい」

「は？」

「なんせ私が発明した装置を悠斗で試しただけで襲い掛かってくるんだ。まあ、悠斗自身はそんなに危険はないんだ」

危険がないとか本人の前で言うなよ。くそ親父。

「はあ……なのはは何故そんなに彼を……？」

「ふふふ、よく聞いてくれたね。何を隠そう、実はなのは君は所謂

シヨタコ……ぐはあっ!？」

親父がとうとう（なのは曰く）禁句を口にしようとしたところ、親父の頭上に突如魔法陣が現れ、弱めのディバインバスターが降り注いだ。

それをもろにくらい、親父は派手に吹っ飛んでいった。

「じ、次元跳躍魔法……？ いや、空間跳躍魔法か、ふふふ、やるな、なのは君」

そう最後に呟くと、ぐふっと口から赤いものを吐き出して親父は気を失った。

「え？ えええええーっ!!!???……きゅ〜」

いきなりのことで呆然としていたユーノはふと我に返ると驚きのあまりひっくり返った。

「どうでもいいんだが、これの始末は俺の仕事なのか？」

今頃電波を受信してプンスカ怒っているのはにこのやろっ、と恨み言を一つ

『私は野郎じゃないよ？ 悠斗君』

なんていうやつだ、おそらくなのは家に盗聴器を仕掛けているに違いない。

そのまま気絶してしまったユーノと壁にもたれるようにして気を

失っている親父をどうやって運ぼうかと考え、ため息をついた。

ちなみに、親父の吐き出したのは血に似せたケチャップだった。

……ベタすぎだろ。

とりあえず小細工を弄してくれた親父には起きた瞬間に金ダライが落ちてくるようにトラップを仕掛けておいた。

第四話『置いて行かれたマスコット』

とうとうこの日がやってきた。今日まで順調にジュエルシードを集め、一息ついたところに来たすずかからのお茶会への招待。

この日に、なのはの嫁(?)のフェイトが来るはず。暗い過去を背負った優しい子らしい。親父は、肉体年齢は同年代だけど精神年齢は四歳に近いものがあると書いていたな。良くも悪くも純粹なんだろう。

なのはも恋人に会えるとなってか、とても嬉しそうだ。

「悠斗君。フェイトちゃんとの勝負は手を出さないでね」

「ん、わかってるさ」

恋人の逢瀬に口出しするほど野暮じゃない。人の恋路を邪魔するやつは馬になんとやらだ。そこら辺はちゃんとわきまえている。

「うーん、なんか最近悠斗君が何か勘違いしているような気がしてならないんだけど……」

「そうか？」

「うーん、こっちもなんとなくだね」

なのはも自分の言葉に確証がないらしく、うーんうーんと唸っている。

勘違いしていること、ねえ……あ、もしかすると

「そうか、嫁じゃなくて夫だったのか」

「ふえ？ 何の話？」

「いや、こっちのことだ。気にすんな」

「余計気になるんだけど……」

そうか、そういうことや、勝手に嫁にしていたけど、なのは主観では旦那さんだったのかフェイト。すまなかったな、早とちりして

「なんだか余計ひどくなったような気がする……」

勘違いの大本が分かったというのになのはの顔色は優れない。まだ何か悩みがあるのか？

「うーん、育て方間違えたかなあ……」

なんか、最近こっちを見るなのはの目が怪しい。目の色がどこかマッド状態の親父に近いものがある。

なんだかんだ言って、なのはが親父に似てきているような……どうしたのかな。

なのはをちゃんとした真人間に戻さなければ！ と気合を入れていると、すずかのお屋敷が見えてきた。

「あ、お兄ちゃん」

「なのはか。それと悠斗、久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです。恭也さん」

ちょうど、すずかの家の門の前で恭也さんと鉢合わせした。

恭也さんとは何回か模擬戦をした中で、何度かしゃべったこともある。

恭也さんが使う神速は、こちらの奥の手と同等の速さを持っていて、なかなか勝負がつかずに相打ちという結果に終わってしまった。

これで膝を壊しているというのだから驚きだ。

なのはは俺と恭也さんが話している間にインターホンを押していた。

ぴんぽーん

「はい」

「あの、高町なのはです」

「あ、なのはちゃん？ はいはい。ちょっとまってくださいねー」

インターホンから元気な声が返ってきたかと思うと、がしゃん、と自動で目の前の門が開いた。

開いていく門に誘われるようになってくるとしばらく歩くと、後ろ

のほうで門が閉まる音がした。

「いつ来てもすごいな、ここは」

「そうだねー」

見渡す限りの広い庭に俺もなのはも感嘆の声を上げる。っていうか個人の家の土地に森があるってどうよ。

驚いている俺たちを尻目に、恭也さんは慣れた様子でそのまま歩いていく。

そして歩くこと一分弱。ようやく月村邸の玄関に到着した。

こんこん

ドアをノックすると、一瞬間の間をおいてドアが開いた。

「ようこそ、お待ちしておりました。なのは様、恭也様、悠斗様」

礼の見本のような綺麗な礼を持って接待してくれたのはノエルさん。先ほどインターホン越しに接待してくれたファリンの姉である。

「本日はお招きに預かり、ありがとうございます」

なのははそう仰々しく言うと、スカートの裾を軽く持ち上げて恭しく一礼した。

変なところで律儀というか、こだわるなのはを見て、思わず恭也さんと二人で苦笑した。と、そこでこの館の主が現れた。

「恭也くくく」

たたたつ、と風を切る勢いで駆けてきたのは月村家頭首であり、恭也さんの恋人でもある月村忍さんだ。

忍さんは俺たちになど目もくれずに一直線に恭也さんのところへ向かうと、抱きついてそのまま恭也さんを自分の部屋へと連行して行ってしまった。

あつという間の出来事になのはと二人して呆然と見送っていると、その奥に小さな人影が見えた。

「あはは、いらっしやい。なのはちゃん、悠斗君」

「すずかちゃん、こんにちわ」

「よっ、お邪魔してるぞ」

「うん、じゃあ、こっち。アリサちゃんはもう来てるよ」

恭也さんを引っ張っていった忍さんと入れ替わるようにホールに出てきたのはすずかだった。

すずかはくるつと踵を返すと、俺たちを先導し始めた。

「相変わらず仲いいよね。あの二人」

「うん。でも、お兄ちゃん忍さんと付き合うようになってからは柔らかな表情を見せるようになったし、よかったと思うよ」

「私も。お姉ちゃん最近楽しそうだもん」

きゃいきゃいと話す女の子二人の会話になんとなく入り辛くて黙っている、なのはがこっちに話を振ってきた。

「そつえば悠斗君。ユーノ君はどうしたの？」

「ん？ ああ、置いてきたけど…なにかまずかったか？」

「んー、まあいいんだけどね。なんとかなるだろうし」

「えー、ユーノ君連れてきてくれなかったの？」

「悪かったな、すずか」

どうやらすずかはユーノが気に入ったらしく（フェレットが珍しいという線も捨て切れないが）、残念そうにしていた。

うーん、でもあいつエロいしなあ。しょっちゅうなのは下に纏わり付いてるし。なのはも、前（過去）の時は気づかなかったみたいだけど、今回親父に指摘されて気づいたみたいだ。さすがに友人がそんなエロ餓鬼みたいだったことにショックを受けたようで、少し距離を置いているようだ。

あ、もしかして今日のイベントで結構重要な位置にいたとか？
まずったか…ま、なのはが聞いて言うんなら大丈夫だろ。

「ううん、あ、アリサちゃん」

どうやら到着したらしい。すずかの視線を追ってみれば、高級感あふれるチェアースェットに座り、優雅に茶を嗜むアリサの姿が。相変わらず絵になるやつだった。

「あら、なのはに悠斗。遅かったわね」

「そうかな？ アリサちゃんが早すぎるだけだと思っけど……」

「そうだね。アリサちゃんが来たの一时间ぐらい前だし」

「……もしかして、アリサちゃん今日のお茶会すっごく楽しみにしてた？」

「ぐっ……そ、そうじゃないわよ。ただ鮫島がこの近くに用があるみたいだったから、ついでよっいで」

いくら用があったとしても、主の用よりも私用を優先させる使用人などいるはずがないのに……

顔を真っ赤にさせて慌てふためくアリサは、相変わらずわかりやすかった。

いい玩具ができたー。とアリサをいじりにかかったなのはを止めるためにアリサをフォローしておく。

「そうか。使用人の用事を優先させてやるなんてアリサは優しいんだな」

でも、アリサのことだから本当に鮫島さんのために時間を詰めた、という線も否定できない。

「え？ あ、そ、そう？」

「うんうん。アリサは将来大物になるかもな」

なのははアリサをからかえなくなつてちえー、と口を尖らせた。
……なんか、なのは、親父にかなり似てきたな。言ったら本人死ぬ
ほど後悔しそうだから言わないけど。

「はい、お待たせしましたー」

そこに、ふらふらとファリンさんがお盆を持ってやって来る。

まずい、と思った瞬間にはすでに遅かった。ファリンさんは、特
に何にもないところで何かにつまずき、バランスを崩した。

ぼーん、と綺麗に投げ出されるお盆。俺は慌ててそのお盆に飛び
ついて、何とか零すことなくキャッチした。なのははファリンさん
を支えようとして潰されていた。

「あ、すみません悠斗君。助かりました」

「いえ……」

俺のことはいいから、と言おうとしたが、もう遅かった。ファリ
ンさんの後ろにはいつの間にか現れたノエルさんの姿が。

「ファリン」

「ひあっ、はい……」

「お客様に馴れ馴れしくする上に、迷惑をかけるなんてどういふことですか。……少しお説教が必要みたいですね」

「え？ あ、ちょ、待って、お願い、連れてかないで……」

ファリンさんは、悠斗君、なのはちゃん、助けて〜と叫びながらノエルさんに連れて行かれた。

ま、ノエルさんはああ言っていたけど、ファリンさんのフレンドリーな所は長所でもあると思う。……客をもてなすメイドとしてはともかく。

日常茶飯事なのだろう。すずかはすこし苦笑すると、すぐに気を取り直した。

「お茶は俺が淹れるよ」

メイドさん二人が去って行ってしまったせいでお茶を煎れる人が居なくなってしまったので、なのはの期待に答えて俺がお茶を煎れることに。

実は、なのは発案で、親父に例の機械でお茶の煎れ方やら、食事の作り方から、果てはエスコートの仕方まで色々叩き込まれたのでばっちりだ。

もちろん、世界に名だたる料理人の腕を再現しているのだが、それでも何故か桃子さんの料理やスイーツ、土郎さんの珈琲紅茶には全く敵う気がしない。

「へえ、あんたお茶煎れたの？」

「まあな、いいから見てろって」

手に持っていたお盆をテーブルに置く。

既に暖めてあるカップを並べ、ガラス製の高そうなポットの中にダージリンの茶葉を適量入れ、少し高い所から静かにお湯を注ぐ。……ダージリンなら軟水がいいんだけど、これは普通の水道水みたいだな。まあいいか。

人様の持ってきたものにけちも付けられないので、そのまましばらく蒸らしておく。ポットの中では熱湯の対流によって茶葉が浮き沈みしているのが見える。

へえ、となのはがポットの中でゆらゆらと揺れる茶葉に目を奪われる。これはジャンピングという現象なのだが、家のやなのは家のものは、ガラス製なんていう高価なポットを使ってないので俺も見るのは初めてだ。

「なかなか手際が良いわね」

「当たり前だろ。土郎さんのお墨付きなんだから」

「へえ。土郎さんの？ それは楽しみにしてるわ」

アリサの挑発的な視線を受け流し、ポットを水平に円を描くようにそつと上下させてやる。茶葉を崩さずに茶の濃さを整えるためだ。

そして、ストレーナーを通してカップに回し注ぎをしていく。

うん、いい感じ。

注ぎ終わると、受け皿を添えてそれぞれの目の前に置いていく。ここら辺も強制的に覚えさせられたために完璧だ。

「なんか、友達にこういうことされるのってくすぐったいわね」

「そうだね。なんか新鮮」

くすぐったそうに身をよじる二人に対し、お茶はいつも俺に煎れさせているのはは、そう？ と首を傾げている。

「さ、飲んでみてくれ」

「うん」

「「いただきます」」

なのはは嬉しそうに、すずかとアリサは恐る恐るカップに口を付けた。

「あ、おいしい」

「意外そうに言うなよ、おい」

「だって、なんか普段のあんたからは想像つかないんだもん」

失礼なやつだな。まあ、自分でもこれはずるしたのに近いのは分かっているからあんまり強くは言わないけどさ。

「でも、本当においしいよ。なのはちゃんいつもこんな飲んでるの？ いいなあ」

「そうね、どう？ 自給300円で雇われてみない？」

「さらさら、お前らにはちゃんと入れてくれる人がいるだろうが。」

「だめだよ、アリサちゃん。悠斗君は私のだから」

「ちえ、いいわよ。悠斗はなのはに譲ってあげる」

俺を物みたいに言いやがって。っていうかいつから俺はなのはの物になった？ くそ、あいつ俺のことを便利な幼馴染だと思ってるのか？ このままじゃあ、これから会うフェイトと一緒に扱き使われそうな気が……あ、きた。

おれがなのはの夫こと、フェイトのことを思い浮かべると同時に、ジュエルシードの反応が出た。

俺となのはは同時にぴくん、と反応した。

「「？」」

「ちよつとごめん、二人とも。私森のほうに行かなくちゃ！」

おい！

「ちよつと、なのは！？」

「なのはちゃん！？」

たたたつ、と脇目も振らずに賭けていくのは。よっぽど恋人に会えるのが嬉しいんだろう。二人の呼びかけにも気づいてない。

で、もちろん二人の視線は取り残された俺に来るわけで……

「あー、うん。帰ってきたら説明するから、とりあえず森には近づかないでくれ。すぐ戻ってくる」

そう言うのが早いか、俺も逃げるかのように森へと駆け出した。俺だって早くフェイトのことを見て見たかった。

「ちゃんと説明しなさいよー！」

「早く帰ってきてねー！」

後ろから叫ぶ二人に後ろ手で手を振り返す。まあ、説明するのは別に良い。っていうか今日説明してからジュエルシードもといフェイト戦に挑むつもりだったんだ。何でか、色々あって出来なかったが、帰ってきてからすれば良いだろう。

とりあえず一旦二人のことは頭から締め出して、なのはの元へと全速力で向かった。

第四話『置いて行かれたマスコット』（後書き）

ここからは一応私のオリジナルですが、どうでしたか？一応作風は崩さないように同じような感じを心がけました。

第五話 『原作崩壊!?!』

「っ！　なのは！」

森に入ると、すぐになのはの背中が見えた。その間にある二十メートルほどを二秒足らずで駆け抜ける。

一瞬で追いつき、お互い顔を見合わせた。次の瞬間、前のほうで魔力が膨れ上がるのを感じた。

「これは……」

「ジュエルシード！」

なのはが隣で走るスピードを上げた。俺もそれに合わせるようにスピードを上げていく。

ふっ、と不自然に森が途切れ、広い広場に出た。そして、そこにはジュエルシードを取り込んだ巨大な猫の姿が。

「……話には聞いていたが、でかいな」

「そだね。私もびっくり」

視界いっぱい広がる猫の姿に、そのままつい二人してぼく、つと見入ってしまった。と、そこで悠斗は気配で、なのはは魔力で何者かの接近を同時に察知した。

「これは……」

「フェイトちゃん！」

「って、なのは!？」

かつての恋人(?)が近くにしていると知って、どうやら我慢できなくなったらしい。なのはが飛行魔法を一瞬で展開し、魔力反応があったほうへと飛んでいった。

なのはは時々こういう風に周りが見えなくなることがある。悠斗は完全に置いてきぼりになってしまった。

「ったく」

最近富に暴走しがちな幼馴染にため息をついて、悠斗も拙いながら飛行魔法を展開し、空へと飛び上がった。

「えっと……どうなってるんですか？」

俺の目の前でフェイトがきょとん、とかわいらしく首をかしげる。うん、なのはが惚れるのも無理は無い。妻帯者じゃ無かったら俺も惚れてるところだ。

何でフェイトが俺の家にいるのか、それは俺にも分からない。ジユエルシードを穩便に封印した後に、なんとなく流れでこうなった。

フェイトには敵対の意思はなさそうで、今も出されたお茶請けをはむはむと頬張っているところだった。隣でその小動物的なかわいらしさに悶えているのはを意識から外して会話を続ける。

「あゝ、実は俺たちもジュエルシードを集めているんだ」

「あ、そうなんですか」

「うん、ユーノっていうやつが発掘したんだけど輸送にしくじってね。その尻拭いを俺たちがしているんだけど……」

「へえ〜」

……なんか反応軽くありません？

「ま、それで俺たちも集めているんだけど、君は？ 何で集めてるの？」

「あ、私は母さんがあつたらいいな、って零してるのを聞いたから、つい」

「うーん、なのはの言っていたシナリオと若干差異があるみたいなんだけど……」

なのははさつきから考え込んでいるし、こういうときに頼りになる親父は何故かユーノ連れて泊りがけでどこか行ってるし。肝心なところで使えんな、まったく。

「そっか。でも、これはユーノのだからあげるわけにもいかないんだけど……」

「そう、ですか……」

俺が困った風に告げると、フェイトは悲しそうに目を伏せた。

ええい、そこ！ 俺を攻めるように見るんじゃない！

「あ、でもね、魔力を使うだけならいいかも……」

「おいおい……」

計画していたこととまったく違うことを言い出すのはに突っ込みを入れると、てへっ、と可愛らしく小首を傾げられた。相手は三十路だぞ！ しっかりしろ、俺！

「あ、あの……私はどうすれば」

「ん？ ああ、そうだな……家に泊まっていくといい。ちょうど親父もいないし」

「あ、ありがとうございます」

「悠斗君！？」

なんでそんな、裏切ったな！？ っていう顔すんだよ。

「だってなのはの家に突然外国人の女の子連れて行っても怪しまれるだけだろう？」

親父が説明に行くとは言っていたが、さすがにまだ行っていない

だろう。

「それは……でも、悠斗君が危ないから」

「いやいやいや、心配するの俺かよ!」

普通フェイトだろう!

隣で、ほえ? とこれまた愛らしく首をかしげているフェイトを指差してやると、何故か両手で握られた。あ、柔らかい。

「じゃ、じゃあわたしも泊まる!」

「ん……そうだな。ついでにいつものメンバーも呼ぶか。まだ七時だし」

「へ?」

おいおい、そんなはしたなく口を開くなよ、みつともない。

「なのははいつもの部屋で……しまったな、部屋が足りない。なのはと相部屋でいいか? フェイト」

「あ、はい。構いませんけど……」

よしきた。これでははやてを呼ぶだけだ。

ポケットからスライド式の携帯を取り出すと、短縮からはやての名前を選んでプッシュ。

「……あ、もしもし？ はやて？」

『あ、うん。何や用なん？』

「ああ、今日お泊まり会しようってな。いつものメンバーと、なのはの新しい友達が一人いるんだけど、いけるか？」

『あ、うん！ かまへんよ。なら今から行くな』

「ちょっと待て、一人で来る気か？」

『え？ うん』

「……アリスに頼むから玄関で待ってる」

『え？ でも……』

「迷惑じゃない。いいな」

『……うん。ありがとな』

「いや、じゃあな」

ぶちっ、と切ると、同じように二人にも電話をかけた。

二人からは無事OKをもらえ、アリスははやてを拾ってくることを了承してくれた。

「さて、と。賑やかになるな。お菓子の準備でもするか」

「そだね」

「え？ 何が始まるの？」

流れの速い展開に戸惑うフェイトに、なのはと二人して笑顔を向けた。

「パーティだよ」

きよとん、と首をかしげるフェイトがなんだかおかしかった。

「そついえばなのは」

「ん？ 何？」

放課後、塾があるアリサたちと別れていつものように悠斗の家に向かっているところで、昨日の事を思い出した悠斗がなのはに話しかけた。

「フェイトがさ、特に無理してジュエルシード集めてない、って言うってたよな」

「あ、そうだったね」

ぼかんとした表情を見せるのはもやっぱり悠斗と同じですっかり忘れていたらしい。まあ、それだけ昨日のパーティーが面白かったということだろう。

今日の朝慌しく帰って行ったフェイトの事を思い返した。特に虐待を受けているわけでもなさそうだったし、『優しかった』母さんではなく、『優しい』母さんだとも言っていた。他にも変わっているけど面白いおじさんが時々来るとか。　　違っよな？

「どうなんだ？」

「どうなんだろう？」

いつものように答えを知っていきそうな親父はこんなときに限ってどっかに泊まりこんでいる。っていうか今が大変な時期だって分かっているはずなのに遊び呆けるくそ親父には呆れるしかない。……まあ、どうせどこかでしょうもない悪巧みを考えているんだろうけど。

しかし、親父が開発したという、次元世界間の通信すら可能だというめっちゃくちゃな携帯でも親父の携帯には繋がらなかった。

「ちて、どっしたものが……」

家のドア前に立ち、ドアの上に設置されているカメラを見る。ぴっぴっ、という電子音がすると同時にがちゃ、と鍵が開いた。なんでも虹彩で判断しているらしいが、詳しい仕組みはさっぱりだった。

「ま、とりあえず成り行き任せだな」

「そだねー。あ、ジュエルさん帰ってきて……る……?」

「どうしたなの? あ、親父と……どなたです?」

先に帰っていたらしい親父がリビングから顔を出したが、その後にとんでもない美人がひよっこり顔を出した。

「お帰り、悠斗、なのは君」

「あら、お帰りなさい」

「あ、ただいま……です」

ふと、にやにや笑っている親父の視線がなのはに向かっているのに気づいて隣を見れば、なのはが絶句したまま固まっていた。

「今度は何したんだ? 親父」

「なに、ちょっとした旧友を紹介しようと思ってね。こちら、二十年来の親友プレシア・テストアロッサだ」

「よろしく」

「うっそ!?! あ、ごめんなさい。ちょっと驚いただけです」

似てない、と言いかけた言葉をプレシアさんの寂しそうな表情を見て飲み込んだ。

でも、驚きは消えないのでまじまじと見つめる。たっぷりとした

黒髪に、鋭利な表情をしているがどこか温かみを持った雰囲気をした女性だった。正直、なのはの話とまったく噛み合わない。

って、あれ？ 親父とプレシアさんが二十年来の親友？ ってことは……

「ジュエルさん？」

「はっはっは、何かね？ なのは君」

「どづいづことですか！？ これえ！」

ちょっとパニックになって、なみだ目のなのはの叫び声がリビングに空しく響いた。

第五話『原作崩壊！？』（後書き）

なんとか予告どおり二週間以内達成です。キーボード叩くのも久しぶりなので指が遅い遅い……が、頑張ります。

感想等ありましたら作者のターボになるかもしれません。よろしくお願いします。

第六話

あの後、何とか落ち着きを取り戻したなのはを促して皆で席に着いた。

「……説明、してくれますよね？」

「もちろんだとも」

アノ状態になったなのはの眼光を受けて親父は即答し、深く頷いた。

自分が管理局の手から逃げるのに手を貸してくれた恩人がプレシアであること。それから親交を深めていったこと。アリシアを助けるためにいろいろやっていたこと。つい先日アリシアは生き返り、家族間は良好であること。

などなど、いろいろと爆弾発言をしてくれた。

「え……？ それって」

「うん、大丈夫。フェイト君がむやみに苦しむことはない。絶対だ」

「ええ、例え私のミスから生まれてしまったからとはいえ、私の子供に違いないもの。そんな酷い事はしないわ」

力強く頷き返す二人の真摯な瞳をしばらく呆然と見つめていたのはだったが、じわじわと目に大粒の涙が溜まっていった。

「っ……よかった。っ、よかったよお」

隣に座っていた悠斗の胸に顔を埋めながら、ヒック、ヒックと嬉し涙を流し、ぐちゃぐちゃな顔で綺麗に笑うなのはの背を、悠斗はおっかなびつくり、ゆつくりと撫でてやった。

「ふえ、ええええん」

わんわんと、子供のように泣き喚くのはにどうすることもできずにおろおろしている自分とは違い、優しい顔でなのはを見守ることが出来る大人二人を少し、ほんの少しだけ羨ましく思った。

「なのは」

「なあに？ フェイトちゃん」

「えっと、姉さん……アリシア姉さんを紹介したいんだけど」

「アリシアちゃん？」

うん、と頷いたフェイトの後ろから、フェイトをそのまま生き写したかのような容姿の少女が、お揃いの金髪をポニーテールにして顔を出した。

「えへへっ、よろしくねなのは、悠斗。ジェイルのおじさんから色々聞いてるよっ」

ぶいつ、と満面の笑顔で手を突き出すアリシアは、静かなフェイトとは違い、活発そうだった。

一瞬姉妹のギャップに呆気にとられた二人だったが、すぐに我に帰ると同じく満面の笑みを返した。

「高町なのはだよ。なのは、って呼んでね」

「高梨・S・悠斗だ。間のSはScaglietti……スカリエッティ……親父の苗字だな。いつもは母さんのほうを名乗ってる。俺も悠斗でいい」

「うんっ、よろしくねっ」

ぱあっ、と弾ける様な笑顔をこぼしたアリシアは、悠斗となのはの手に取ると、うれしそうにぴょんぴょん跳ね回った。

「うん、よろしくね」

「……あ、ああ」

いけない。ついアリシアの笑顔に見とれてた。

いや、でもなのはにはフェイトがいるんだから、アリシアは俺が好きになっても……

「っ……ど、どうしたんだ？　なのは」

「うん、なんでもないよ？」

「そ、そっか……」

なんだ？　今なのはからの強烈な殺気が隣を通り過ぎていったよ
うな……もしかして嫉妬か？　くそ、いいじゃないか、なのはには
フェイトがいるんだから。俺にも恋愛する自由くらいは……

「あ、そっだ悠斗」

「あ、な、なんだ？」

「悠斗ってすっごく強いんでしょ？　見せて見せてー！」

「ああ。いいけど……」

反射的にOKを出して、ふと会話に参加していなかった二人のほ
うを見ると、放って置かれて少し不満だったようだ。特になのはは
めらめらと目を燃やしながらアリシアを見ていた。……あれ？

「行くっ、悠斗君。い・つ・も・私に見せてくれる奴じゃないやつ
にしてね」

「あ、ああ。いいけど……何にむきになってるんだ？　なのは」

「……悠斗君のバカ」

「えー、悠斗は馬鹿じゃないってジェルおじさん言ってたよ？」

「っ、あ、こ、これは……ち、違っの。本当はそんなこと思ってな
いんだからね。悠斗君っ」

「わかってるさ。そんなにむきにならなくても」

顔を真っ赤にして詰め寄ってくるなのは頭を撫でてやるとふにやっ、といったもののように笑み崩れた。

手を離しても離れず、懐いた猫のようにぴったりと側にくっついてるなのはを見て、思わずフェイトの方を伺ったがニコニコと楽しそうに微笑んでいるだけだった。

(あれ? …… あ、そうか)

良く考えたらこのフェイトはなのはの嫁のフェイトじゃなかったんだ。失礼なことをしたな、と声に出すわけにもいかないので心の中で謝っていると、いつの間にかなのはの反対側に擦り寄ってきたアリシアがにこー、と楽しそうな笑顔を浮かべてこちらを見ているのに気づいた。

「……悠斗って、綺麗だね」

「え?」

「うーん、なんていうか、顔とかも整っているんだけど、何より魂がすつごく綺麗。なのはみたいに太陽みたくでもないし、フェイトみたいに月の光みたいな感じでもない。んー、なんていうのかなあ……」

うーん、うーんと肩にかかった髪の毛をいじりながらしばらく唸っていたアリシアだったけど、結局いい表現が浮かばなかったようだ。

「上手く口に出せないんだけど、あつたかくつて、気持ちよくつて、側にいたらほつとできる感じ、かなあ。きらきら光つてて……うん。私は好きだな。悠斗のこと」

「あ……え……」

いきなりの爆弾発言に、顔を真っ赤にしてぱくぱくと口を動かすことしかできなくなった悠斗を見て、その張本人というと、あははっ、と可愛らしく照れ笑いをした。

「ごめんごめん、急で驚いちゃったかな？ なんでも私つて、ジエイルおじさんにヒュドラが爆発する前に魂だけで助け出されて、後の魂が抜けちゃった私の体に定着させられたみたいなの。まあ、私は目の前が光つたと思ったら時の庭園にいたから実感はないんだけどね。」

まあ、詳しいことは私にも分からないんだけど、私にはその副作用みたいなのでその人の魂が見えるようになったんだよ」

こんな感じ。ともやもやとしたもやのようなものを手で描くアリスアを見ながら、悠斗は感心を通り越して呆れていた。

なんか難しい話をされたけどさっぱりだったよ。と舌を出して照れ笑いするアリスアに悠斗達は苦笑するしかなかった。魂の定義や質量やらを数式にされて分かる小学生がいたら是非ともお目にかかってみたいくらいだ。

「とにかく、一目悠斗を見たときからいいなー、って思ってたんだよ。ね、私達付き合わない？」

「……あ、えーと「だめええええっ」「……お、おい？」

もちろん冗談だろうが、目の奥にどこか真剣な色を見つけ、一瞬真剣に考えてしまった。

何を馬鹿な、と一瞬期待しかけた馬鹿な自分を笑い飛ばして一つ冗談でも言つてこの場はそれで終わり。悠斗はそうなると思つていた。しかし、その考えは甘かつたと言わざるを得なかつた。

突然、弾かれたようになのは悠斗の言葉を遮つて大声で叫ぶと、「うー」と唸りながらアリシアを睨んだ。

敵意を剥き出しにしてアリシアを睨むのはに、軽くチョップを落とした。

「こーら、初対面の人になにやってるんだ」

「で、でも……」

「あはは、ごめんごめん。でも、まだ悠斗つて、誰の物でもないよね？　だ・か・ら、もちろん私にもその権利はあると思っけど？」

「う、うう~~~~」

「ア、アリシア君？」

そこで、なぜかお膳立てした側である親父が少し焦った声を出した。

それを不思議に思っていると、アリシアがにこつと満面の笑顔を浮かべて悠斗の首に腕を絡め、ぎゅっと抱きついてきた。

「ごめんね、ジェルおじさん。好きにならない自信はあったんだけど……やっぱり、好きになっちゃったみたい。……悠斗、貰っていい？」

「……………」

唾然として口をパクパクさせるのはと、何の裏取引をしていたのか、手を額に当てて天を仰ぐ親父と、一つも口を挟めなくてあわあわと右往左往しているフェイトと、それを見て静かに微笑んでいるプリシアさん。

全員の顔をゆっくりと見渡して、悠斗はため息を一つ吐いてから、静かに目を閉じた。

結局、收拾をつけたのはプリシアさんの「ご飯にしましよるか」の一言だった。

「台所借りるわね」と一言残して去って行ったプリシアさんを見送って、ようやく全員が動き始めた。

親父は研究室に、テストロッサ姉妹はなのはが強引に俺の部屋へ連れて行った。

……さて、取り残され、部屋は女の子三人に占拠されてしまった俺は一体どうすればいいだろう？

「じゃあ、次は人参の皮を剥いてくれるかしら？」

「あ、はい」

とんとんとん、と我ながら手馴れた手つきで包丁を操ってプレシアさんが作っているコロッケに添えるキャベツの千切りをし終えると、次は人参に取り掛かった。

こればかりは例の学習装置でも一瞬で覚えられるわけではない。というかそんな項目は用意されていなかった。

しかし、食事は主に研究に熱中しすぎて研究室から出てこない親父に代わって俺が作っているのです。そこそこの熟練度はあると思う。

……所詮は素人目だけど。

「手馴れてるわね。食事はいつも貴方が？」

「はい。親父は研究室にこもってばかりなので」

「やっぱり、あの人は……」

プレシアさんは、頭痛を覚えたかのように額に手を当てながらも、もう片方の手はジャガイモを常に潰し続けていた。

しかし、本当になのはの話とは違う。アリシアへの愛に狂った悲しい人だと聞いていたが、今はそんな風ではなく、懸念されていたフェイトへもしっかりと親としてアリシアと代わらぬ愛情を注いでいるように見える。

悠斗の印象としては、少し厳しいけど、優しい美人な良いお母さんだった。

ふと、そういえばなんだかんだでごたごたしていて、アリシア鍛錬の様子を見せると言っていたのを忘れていた。

「あちゃ〜」

「どっしたの？」

「え、っと、アリシアに鍛錬の様子を見せるって言ったのつい忘れちゃって」

「あらあら」

困ったわね、と頬に手を当てて少し微笑むプレシアさんは大人の女性の魅力をふんだんに見せ付けてくれていた。

身近にいる大人の女性といえば桃子さんぐらいなので、あまりそうだったものに耐性の無い悠斗は少しどきまぎしてしまった。

「まあ、食べ終わってからもやりますし、いいんですけどね」

「あら、そうなの？ ……ふふ、えらく家の子を気に入ってくれているようね」

「うえっ！？ あ、いや、これは、その……」

予想外の言葉に、みっともなくうろたえてしまった悠斗を見ても、プレシアは笑うようなことはせず、ただ嬉しそうに手元の作業を続けた。

どこまでも大人で、相手を気遣えるプレシアは背伸びをしたい年頃の悠斗にとつて、高町さん家の土郎さんの次ぐらいに尊敬できる大人になっていた。

「で、本当のところはどう思っているの？ アリシアのこと。あの子は昔から直感に優れているところがあつたし、それを信じる傾向があつたからきつと君のことは本気だと思つたわよ？」

「……………正直、まだ心に収まりきってません。まあ、アリシアにしてもフェイトにしてもいい子だとは思いますが、本当に付き合ってくれるなら喜んで、というところなんですけど……」

「が？」

安易に可愛い子が付き合ってくれるからといって簡単にそちらに行こうとするのは相手に失礼だと思った。相手が本気なら尚更。

正直、そのアリシアの母親であるプレシアに話すのは少し気まずかったが、さつき少し浮かれていた自分を叱咤しながらプレシアに

正直に自分の思っていることを話した。

「ふふ……ちゃんとアリシアのことを考えてくれているのね。ありがとう」

「いえ、当然のことですから」

褒められても当然のことだから、と返す悠斗はあまり子供らしくないが、プレシアの目には好意的に映った様だった。

笑みをより一層深くして悠斗を見守るプレシアから、悠斗はおもわず赤くなつた顔を背けた。

第七話

「りゃっ！」

一呼吸で突き、唐竹、薙ぎを終え、後ろから振り下ろされた剣を同じく手に持った刀で受け止めると、そのまま勢いに逆らわずに体を沈み込ませて流し、足で目の前の自動人形の足を払った。

自動人形とはいえ、親父が改良に改良を重ねたVer3.6は一見人間と変わらない。皮膚だって人工皮膚でちよつと触ったくらいじゃあ見分けがつかないくらいで、球体だった間接はもう滑らかなものに変わっていた。

この間の血を見た反応からだろうか。やけにリアルになってきた次から次へと押し寄せてくる自動人形の群れを、冷静に一体一片付けていく。

受け、流し、捌く。

まるで後ろに目が付いているかのような正確さで攻撃を見切り続ける悠斗だったが、避けているだけではない。

敵の隙を突いて同士討ちさせたり、攻撃の間を縫って正確無比な一撃を淡々と与えている。

悠斗の容赦のない攻撃によって次々に壊れていく自動人形。しかし、人間でいう致命傷に近い破損を受けた人形は足元に展開した魔方陣によって回収されていく。

壊れたら壊れた分次々に投下されていく。体の骨が軋みを上げる十倍の重力付加の中、悠斗は前身汗だくになって刀を振るい続けた。

叩き潰すことが目的の剣とは違い、刀は切り裂くのが目的だ。今悠斗が持っているのはどこから調達してきたのか、国宝級の最上大業物『孫六兼元』まじろくかねもと。地球上でもっとも切れ味の良い最高の刀の中の一振りには、悠斗の技量も相まって鉄製の自動人形の胴体を真つ二つに切り裂いた。

余談だが、刀は細く、折れやすいと思われがちだが、その実クレイモアで思い切り叩き付けても折れない弾力を誇っている。昔は、素人でも鉄を幾重にも重ねた鎧を切り裂いて肉を切り裂いたことがあるという。

時には相手の武器ごと粉碎しながらその場にとどまり暴風のごとく刀を動かし続ける悠斗を、二階に設置されたVIP室から三人の少女が啞然とした表情で見ている。

「す、すごい……」

「う、わぁ……ジエイルおじさんが自慢することはあるな。で、自信満々に悠斗の訓練内容を語っていたのははなんで驚いてるのかなぁ？」

二人同様、驚きながらも動きを見逃さないように見入っていたアリシアがふと隣でなのも同じように驚いているのを見て、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

「そ、それは……いつもはこんなに激しくなかったし」

うっ、と痛いところを突かれた風に冷や汗を流すのはをニヤニヤとアリシアが眺めていると、何かに気づいたフェイトがあっ、と声を上げた。

「なになに、どうしたのフェイト？」

「う、うん。……もしかしたらね、あれ、人形が持っているのも全部真剣かも」

「……え？」

ぱっ、と勢い良く振り返った二人がよく目を凝らしてみようと、確かに刃引きはされていないようだ。悠斗に受け流された自動人形の持っていた刀で床に鋭い切れ目が入っている。

「え、ええっ!？」

「ど、どうしょ……あっ、あぶない!」

もうこうなつては訓練のように打ち身で済むような話ではなくなってきた。下手すれば死んでしまうのだ。三人は顔を青くしてあわあわと見守っていた。

そんな三人の気苦労など知らず、悠斗はいつもより集中した表情で上下左右360°から来る猛攻をさばいていく。

切り上げを踏み潰し、後ろからの突きを半身で避け、前方三方向からの振り下ろしを上半身を反らしてやり過ぐすと、腰だめに控えていた刀を横一閃に振りぬいた。

剣を振り下ろした状態で硬直していた自動人形たちは、まるで熱したナイフでバターを切り裂くようにやすやすと両断され、地に転がった。

と、そこでビィーッとブザーが鳴って、糸が切れたマリオネットのように自動人形たちの動きが止まり、魔方陣が展開され転移して行った。

「……ふうー」

ひゆるん、と手の中で刀を一回転してから腰の鞘に突き刺した悠斗が振り返って上の三人に笑いかけた。

当然、三人に笑い返す余裕ではなく、へなへなと地面に尻餅をついた。

「ん？ どうしたんだ？ 三人とも」

タオルで汗を拭きながら、上がってきた悠斗が不思議そうな顔をするのに三人は苦笑いを返すしかなかった。

飛来してきた魔力弾をスマール・アンチマギングフィールドS・AMFを発動し、軽く拳を合わせて霧

散させる。大気中の魔力を吸収し、発動する擬似的なリンカーコアの役目も果たすこれはミッドチルダでも、もはや一つどころか三つ四つは先の技術をいつている。

そんなことはいざ知らず、悠斗は親父だから。とやけに説得力のある言葉でぶちぶち言っていたのはを黙らせて使い続けていた。

ジュエルシードを取り込んで魔法生物と化した巨大な蛇の口から吐き出され続ける魔力弾を悠斗は殴り、蹴り、避けていく。

魔力で身体強化された悠斗の動きは人間離れしていた。悠斗の魔力は交感神経や反射神経を高め、気と魔力で強化された体をしっかりと動かしていく。

秒間三発。初速50m/秒の目にも留まらぬガトリングガンのように打ち出される魔力弾は、悠斗をしても苦戦させていた。

「くっ……聞いてないぞ！　こんなの」

思わず愚痴が口をついたが、体は止まらない。しかし、埒が明かないと悟ったのか、相手は誘導弾まで混ぜてきた。

徹底的に潰そうとしてくる相手に背筋が凍る思いをしながらも、悠斗の動きには狂いはない。普段やっている実践そのものの特訓がしっかりと効果が出ていた。

【悠斗君！　準備OK！！】

【了解。頼んだ！】

なのはからの念話に叫び返ししながら、前だけでなく後ろや上、足元と、正に360。方向から襲い掛かる魔力弾を一つ残らず叩きのめす。

と、そこでジュエルシードの暴走体の背後で鮮やかな桃色の魔力光が爆発した。

カッ、と目を焼く光を残し、なのはの放ったスターライトブレイカーは一瞬で暴走体の体を消滅させた。

コロン、と遠目にジュエルシードが待機状態で転がるのを確認し、どさっ、と思わず尻餅を付くと、そのジュエルシードを回収し終えたなのはが駆け寄ってきた。

「はあ、ふう……お疲れ様！ 悠斗君」

「なのはもな」

にはっ、と弾ける様な笑みを見せてくれたなのはに笑みを返す。

正直、なのはが放った見敵必殺のデイベインバスターがあっさりとシールドで防がれたときは肝が冷えたが、何とかなって本当によかった。

「それにしても、なのははこんなのを一人でやってたんだな……」

「あはは……ここまでじゃなかったけどね」

そう苦笑いしながら返すなのはの顔にも疲労の色が強かった。

どうやらこの世界、なのはの生きていた世界とは少し違うらしい。
親父が言うには平行世界だパラルワールドそうだ。

事実、暴走体はなのはも知らない相手ばかりなので納得するしかないだろう。

なのははどうやらフェイトやはやてを向こうの二人と区別しているらしい。あっちの親友、こっちの親友、と。

まあいいことだとは思う。

ぼんやりと、そんなような事を思いながら擦り寄ってきたのはを撫でていると、突然アリシアから念話が入った。

【やつほー！ そっちはどう？ こっちは二つ回収したけど】

【残念でしたー。こっちは三つだよー】

【えっ……】

【えー！？ こっちなんてさあ、どっかのライオンに憑依した暴走体とやりあつたんだよ？】

【こっちも似たようなもんだったぞ、アリシア。というかお前は何かもしてないだろ】

【むー……】

【えへへ……私の勝ちだね、アリシアちゃん、フェイトちゃん】

【ちえー、いいわよ。今回だけだからね】

【うん、次はがんばる】

むん、と念話の向こうで気合を入れるテストロッサ姉妹になにやらなのは得意げに笑った。

何かしらないが、賭けをしていたらしい。内容は教えてくれなかったが。

ちょっと気になるが、そっとしておくことに。触らぬ神にたたりなし、だ。

「さて、帰るか」

「うんっ！」

ジュエルシード探索四日目。精度が上がったなのはの探索魔法や親父のいんちきな科学道具により、半分近くのジュエルシードは発動前に回収することができた。

順調すぎるほどに順調なジュエルシード探索。残すは海の中の四つとなった。

「で、これはどういうことが説明してもらおうか」

「まあ待ちたまえ。そう急くんじゃない、悠斗」

握りこぶしを作つて良い笑顔でたずねる悠斗にスカリエッティは鷹揚な態度で答えた。

関係者が全員集まつた居間の真ん中には、ぐったりと血だらけで横たわつた子猫がいた。

なのはの話では敵方の使い魔の一人らしい。その敵を胸に抱えて帰つてきたスカリエッティに悠斗がとつた態度は決して間違いではないだろう。見れば、周りも頷いている。

「どういつつもりなの？ 貴方は」

「ふむ、まあ強いて言えば……」

プレシアに尋ねられ、スカリエッティは顎に手を当て、もつたいぶるかのようにその場にいる全員の顔を見渡すと、口を開いた。

「人質、だね」

「おいこら、くそ親父」

「あははっ、鬼畜だねー。ジェルおじさん」

「サイッターなの」

どすどすどすっと突き刺さる言葉の刃に、ジェルは意図も簡単

に沈んだ。

猫を掲げるような体勢で地に沈んでいる親父を、プレシアさんはやれやれといった様子で見ると小さく笑った。

なんかその笑みが駄目亭主を支える妻っぽかった。うん、プレシアさんって良妻賢母って言葉がぴったりだし、なんか丁度いいかも。

「で、本当にどうすんだよあの猫」

とりあえず親父は放っておいて、親父特性のメディカルマシンに入れておいた。例の三十分でどんな怪我でも治療するあれ。

「ふむ、あれは本当に成り行きで持って帰ってきてしまったのでないや、どうしたものか」

はっはっは、と笑う親父の頭で、すぱんとなのはの持つスリッパがいい音を立てた。

「取りあえず目が覚めるのを待ったらどうかしら」

「ま、それしかないよね……」

「はあ、とこのややこしい状況に頭痛を覚えたのか頭を押さえながらため息を吐くのは。」

「で、でもあのまま放っておいてもいいの？ 目が覚めたら襲い掛かってくるんじゃないか……」

「あ、それもそーか。どうすんの？ ジェイルおじさん」

「ふ、ふっふっふ……」

「（（（出た、マッドモード）））（（（

「甘い、甘いぞアリシア君。そんなときのために先ほど洗脳モードを発動しておいた！ 具体的に言えば私達への敵意を消して代わりに好意を刷り込むものだ。もちろん悪感情を抱くことは出来ないようにしてある……！」

「「犯罪だっ／なのっ」「」

ぼくしっ めきよっ

「ぶほあっ」

悠斗のボディイブローとなのはの顔面パンチが綺麗に決まり、ジェイルはヒキガエルが潰れた様な声を出してぐと隣に座っていたプレシアの膝に倒れこんだ。ジェイルにしては珍しすぎるくらいのラッキースケベだった。

「あらあら。そんな簡単に暴力を振るっちゃ駄目よ？ 二人とも。特になのはちゃんは女の子なんだから」

「あ、はい」

「ごめんなさいなの……」

ついいつもの感じで殴ってしまったが、確かにごうごうのはよくない。流石のなのもプレシアさんに優しく諭されるとついっし額
いてしまう。

二人して、本気で反省しようとしたとき、ふとプレシアの膝にい
る親父と目が合った。

にやり

ほれ見たことが、やーい怒られてやんのー。言葉にすればごうい
った感じか。

() (前言撤回。これは殴ってもいい) ()

何故かって？ ムカつくからに決まってる。

「あ、あはは……」

「本当、仲良いよねー。あの三人」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9958i/>

逆行なのはさん奮闘記

2011年6月29日20時37分発行